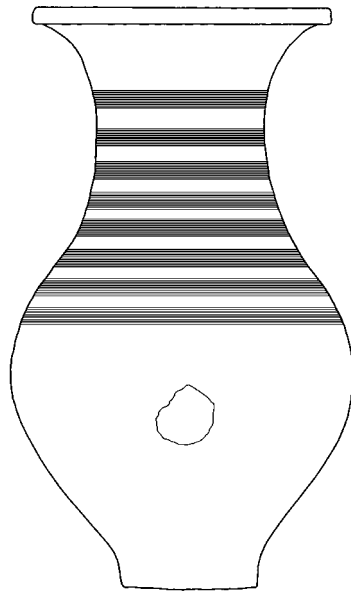


# 長岡京跡右京第696次 発掘調査報告



2001

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

# 長岡京跡右京第696次 発掘調査報告

2001

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 調査地航空写真(北から)



(2) 調査地全景(北東から)

# 序 文

長岡京市は、京都盆地の表玄関に位置し、東に河川が流れ、西に山々が連なるといふ地の利に恵まれており、今も昔も人々の生活するのに適した環境にあります。

当地にはかつて「長岡京」という都がおかれ、王城の地として栄えたのを含め、様々な時代の文化が刻まれています。また現在では、大阪と京都の間に位置し、交通の便もいいことから人々が集まり、新たな文化が育まれています。

ここに報告します調査は、JR長岡京駅東口の駐輪場建設に伴うもので、ここには長岡京跡をはじめ、永井氏による近世勝龍寺城、神足遺跡と複数の遺跡が重複する遺跡の密集地となっています。今回の調査でも、弥生時代から江戸時代に至る複数の時代の遺構が検出されました。これらの成果はそれぞれの遺跡を解明する際の重要な資料として、今後活用されていくものであります。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年12月

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

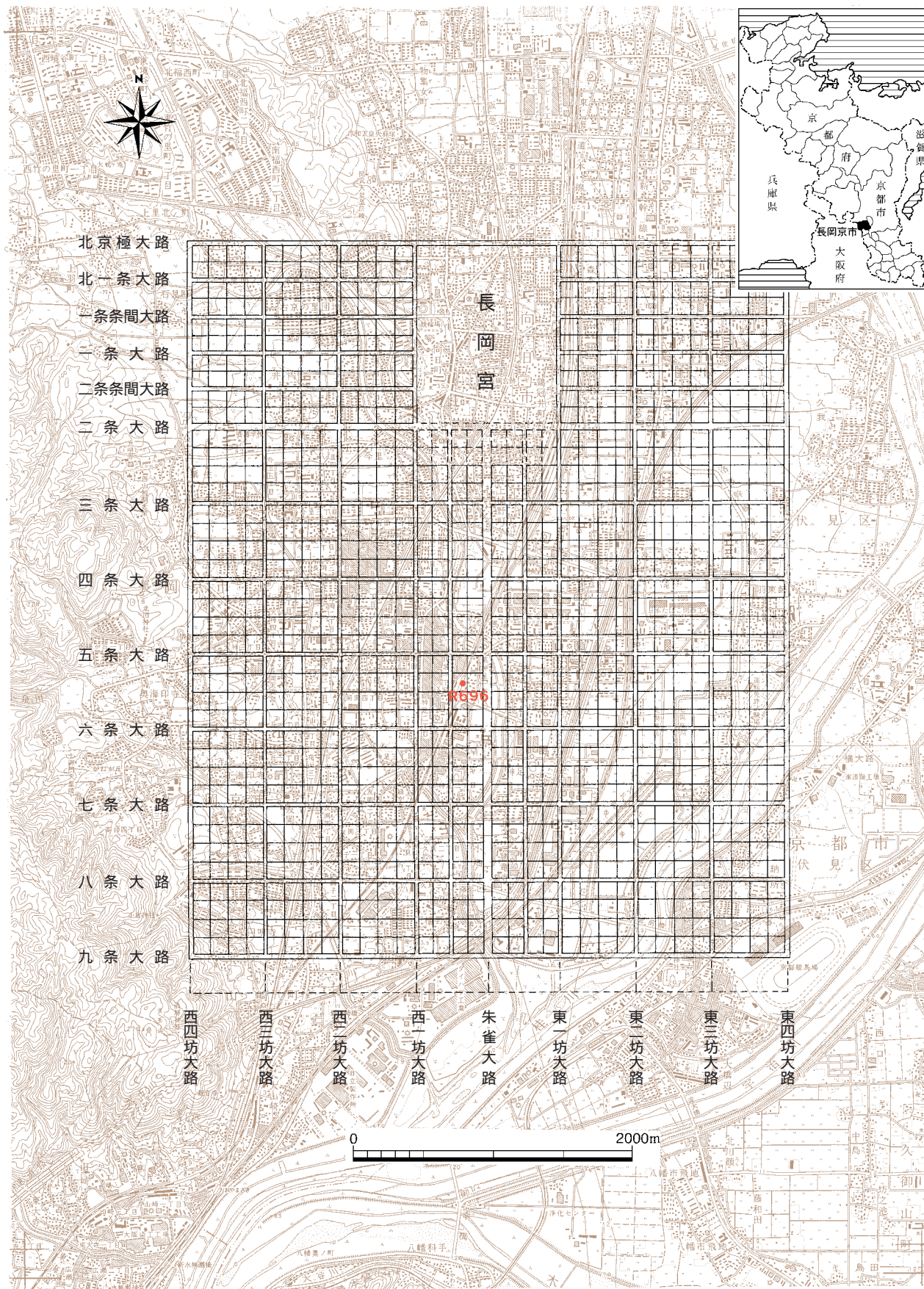
理事長 芦 田 富 男

## 凡 例

- 1．本書は、2001（平成13）年4月9日から同年6月2日まで、長岡京市神足1丁目601・10・11において実施した、長岡京跡右京第696次調査の発掘調査概報である。
- 2．調査は、JR長岡京駅東口駐輪場整備に伴う事前の発掘調査であり、長岡京市教育委員会の委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したものである。現地調査は同センター調査係主査 木村泰彦が行った。
- 3．調査の対象となった遺跡は、長岡京跡右京六条一坊七町及び神足遺跡、勝龍寺城跡である。
- 4．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良国立文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
- 5．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
- 6．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
- 7．現地調査および整理事業には、技術補佐員、調査補助員、整理員の参加、協力を得た。また遺物写真は、西大寺フォト 杉本和樹氏に撮影を依頼した。
- 8．本書の執筆・編集は、木村が行った。

表紙カット 周溝S X32出土壺





第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40,000)

## 本文目次

	序文.....	i
	凡例.....	ii
1	はじめに.....	1
2	調査経過.....	2
3	検出遺構.....	2
	江戸時代の遺構.....	4
	鎌倉時代の遺構.....	8
	平安時代の遺構.....	9
	長岡京期の遺構.....	12
	弥生時代の遺構.....	14
4	出土遺物.....	16
	江戸時代の遺物.....	16
	鎌倉時代の遺物.....	17
	平安時代の遺物.....	18
	長岡京期の遺物.....	19
	弥生時代の遺物.....	21
5	まとめ.....	23

## 付表目次

付表 - 1	報告書抄録.....	25
--------	------------	----

# 図 版 目 次

- 巻頭図版 ( 1 ) 調査地航空写真 ( 北から )  
( 2 ) 調査地全景 ( 北東から )
- 図版 1 ( 1 ) 調査地周辺の航空写真 ( 北から )  
( 2 ) 調査地航空写真 ( 東から )
- 図版 2 ( 1 ) 江戸時代の遺構 ( 北から )  
( 2 ) 江戸時代の遺構 ( 南から )
- 図版 3 ( 1 ) 柵 S A 02 ( 西から )  
( 2 ) 柵 S A 03・04 ( 東から )  
( 3 ) 柵 S A 05・06 ( 南から )  
( 4 ) 柵 S A 08・09 ( 東から )
- 図版 4 ( 1 ) 鎌倉時代～長岡京期の遺構 ( 南から )  
( 2 ) 鎌倉時代～長岡京期の遺構完掘状況 ( 北東から )
- 図版 5 ( 1 ) 鎌倉時代～長岡京期の遺構完掘状況 ( 北から )  
( 2 ) 溝 S D 14・柵 S A 15 ( 東から )  
( 3 ) P - 98 ( 西から )  
( 4 ) 土坑 S K 21 ( 西から )
- 図版 6 ( 1 ) 弥生時代の遺構 ( 東から )  
( 2 ) 弥生時代の遺構 ( 北から )
- 図版 7 ( 1 ) 周溝 S X 32 遺物出土状況 ( 北から )  
( 2 ) 方形周溝墓 S X 28 南辺周溝断面 ( 西から )  
( 3 ) 方形周溝墓 S X 28 東辺周溝断面 ( 南から )
- 図版 8 出土遺物
- 図版 9 ( 1 ) 鎌倉時代出土遺物  
( 2 ) 平安時代出土遺物
- 図版 10 ( 1 ) 長岡京期出土遺物  
( 2 ) 弥生時代出土遺物



# 挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40,000)	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5,000)	1
第3図	調査前の状況 (北から)	2
第4図	発掘調査風景 (南西から)	2
第5図	調査地土層図 (1/100)	3
第6図	江戸時代検出遺構図 (1/150)	4
第7図	柵 S A 03・04実測図 (1/80)	5
第8図	柵 S A 02実測図 (1/80)	5
第9図	S K 07実測図 (1/40)	6
第10図	柵 S A 05・06実測図 (1/80)	6
第11図	柵 S A 08・09実測図 (1/80)	7
第12図	鎌倉・平安時代検出遺構図 (1/150)	8
第13図	掘立柱建物 S B 26実測図 (1/80)	9
第14図	掘立柱建物 S B 25実測図 (1/80)	10
第15図	溝 S D 10・20・23実測図 (1/40)	10
第16図	柵 S A 27実測図 (1/80)	10
第17図	P 97・98実測図 (1/40)	11
第18図	土坑 S K 21実測図 (1/20)	11
第19図	長岡京期検出遺構図 (1/150)	12
第20図	柵 S A 15実測図 (1/80)	13
第21図	溝 S D 14実測図 (1/40)	13
第22図	土坑 S K 22実測図 (1/40)	13
第23図	弥生時代検出遺構図 (1/150)	14
第24図	方形周溝墓 S X 28、周溝 S X 29・32断面図 (1/40)	15
第25図	出土遺物実測図 - 1 (1/4)	17
第26図	出土遺物実測図 - 2 (1/4)	18
第27図	出土遺物実測図 - 3 (1/4)	20
第28図	出土遺物実測図 - 4 (1/4)	22
第29図	出土石製品実測図 (1/8・1/4)	23



## 2 調査経過

調査地はJR長岡京駅東口の北東側約50mの地点で、地形分類上は低位段丘上に位置する比較的安定した個所である。調査地は以前鉄道関係の施設があった場所で、全体に盛土がなされており、現状での標高は22.5mである。当地は現在のJR東海道線の軌道に隣接していることから、まず調査対象地と軌道との境にフェンスを設けて安全対策を講じた後、調査地内のゴミ類の片づけ、草刈り、整地などの周辺の整備を行った。その後、バイク用駐輪場建設予定部分に合わせて南北20m、東西16mの矩形に調査区を設定し、平成13年4月9日より重機により整地土、藪土の除去を行った。その後人力によって、江戸時代・鎌倉時代・平安時代・長岡京期・弥生時代の各遺構面を順次調査し、平成13年6月2日に現地での作業を終了した。調査面積は320m<sup>2</sup>である。

## 3 検出遺構

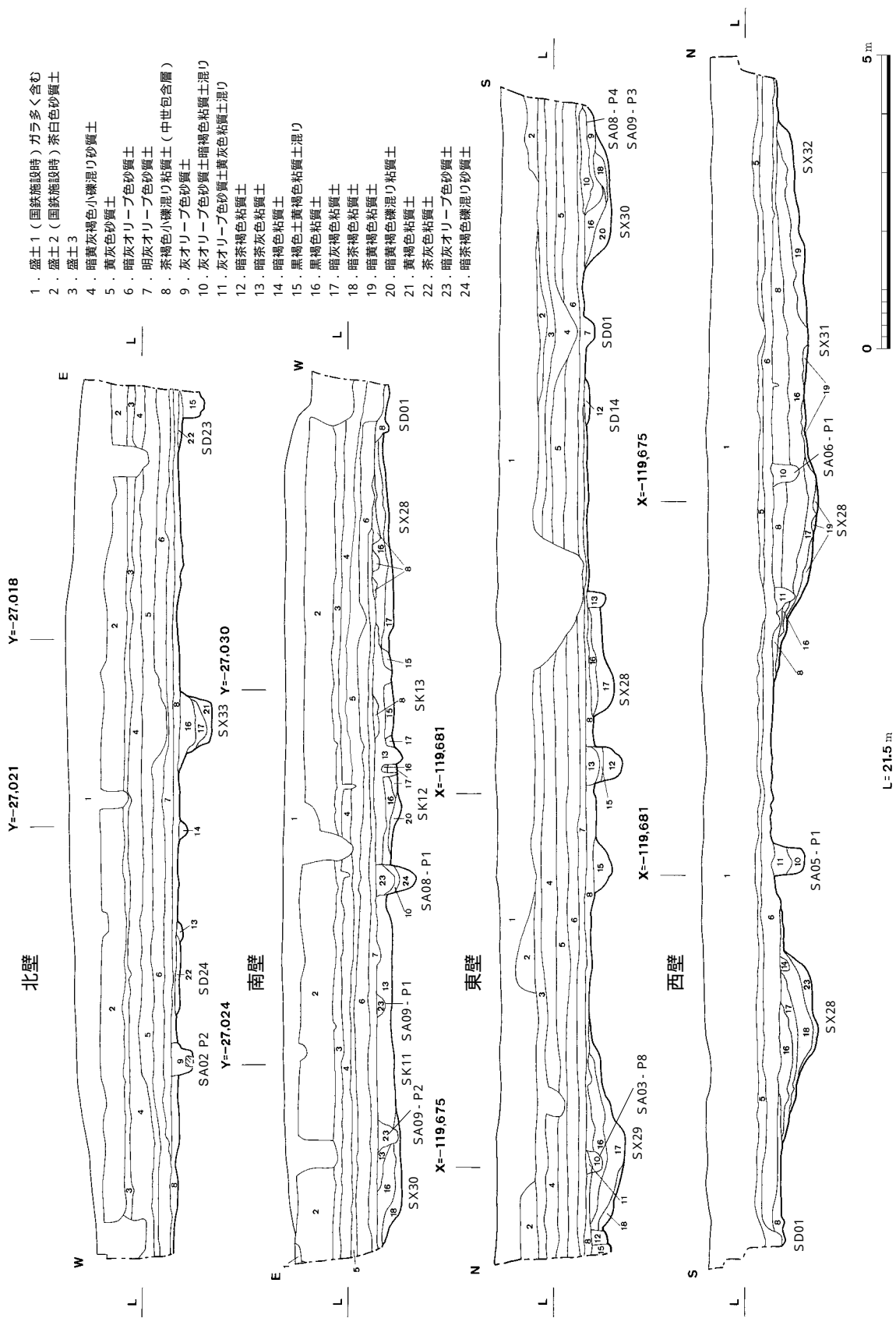
調査地内の基本的な層序は、上面から約1m程の厚さで3層の旧鉄道省・国鉄時代になされた盛土（第1～3層）があり、その下に0.5～0.7mの暗黄灰褐色小礫混り砂質土、黄灰色砂質土、暗灰オリーブ色砂質土1、暗灰オリーブ色砂質土2（第4～7層）の堆積がある。当地周辺は以前竹藪としての利用がなされていたことが判明しており、これらの堆積層は竹藪に伴う客土と見られるものである。これらすべてを除去した段階で、黄灰色粘質土を主とする地山面に至り、その上面で江戸時代の遺構を検出した。検出された面の標高は約21.0mである。また調査地の北東部には、部分的に約0.1mの中世遺物を包含する茶褐色小礫混り粘質土（第8層）の堆積が認められる。これをさらに除去した段階で、鎌倉時代、平安時代、長岡京期、弥生時代の遺構面となる。以下各時代別に検出された遺構について述べることにする。



第3図 調査前の状況（北から）



第4図 発掘調査風景（南西から）



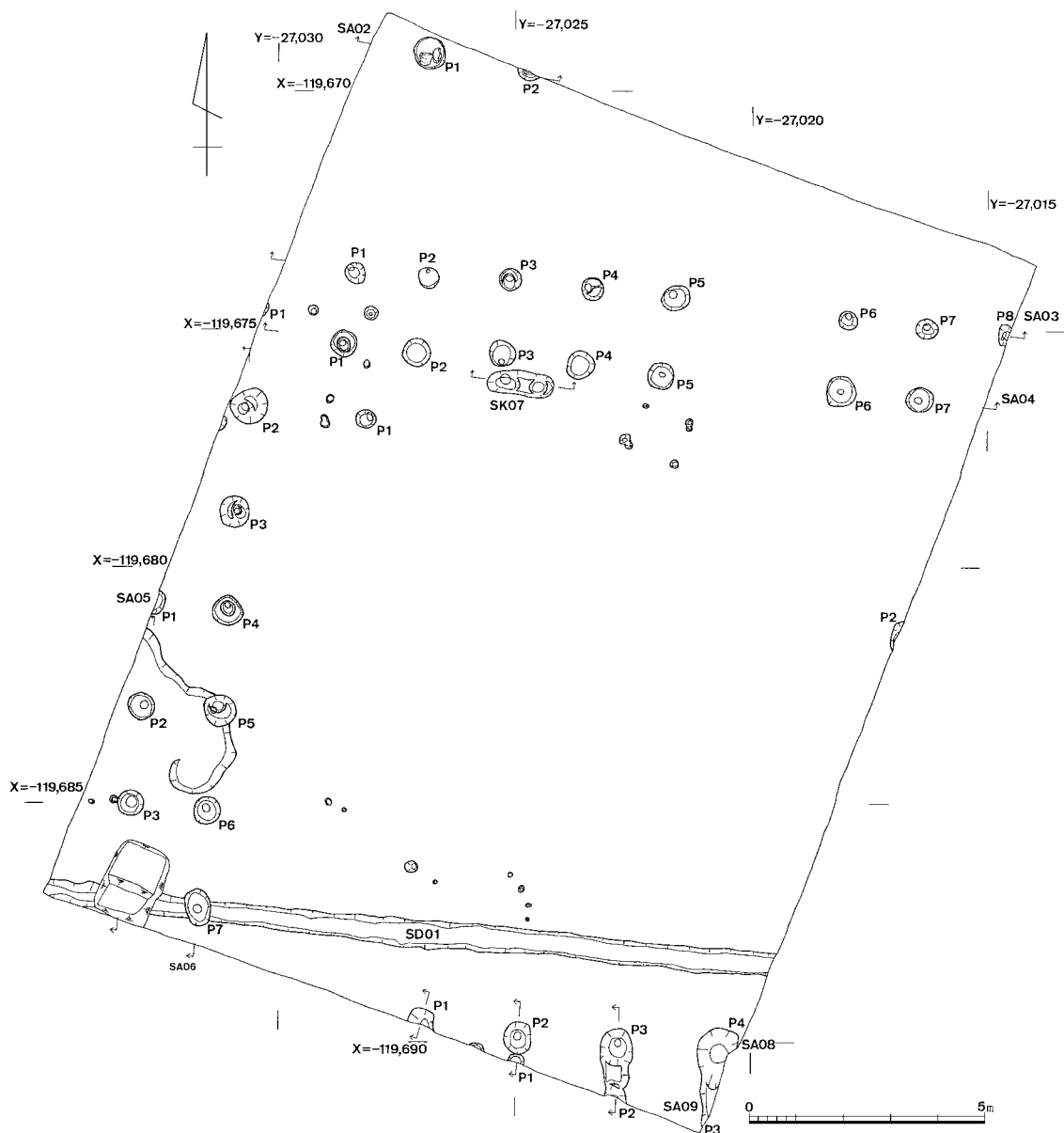
第5図 盛土土層図 (1/100)



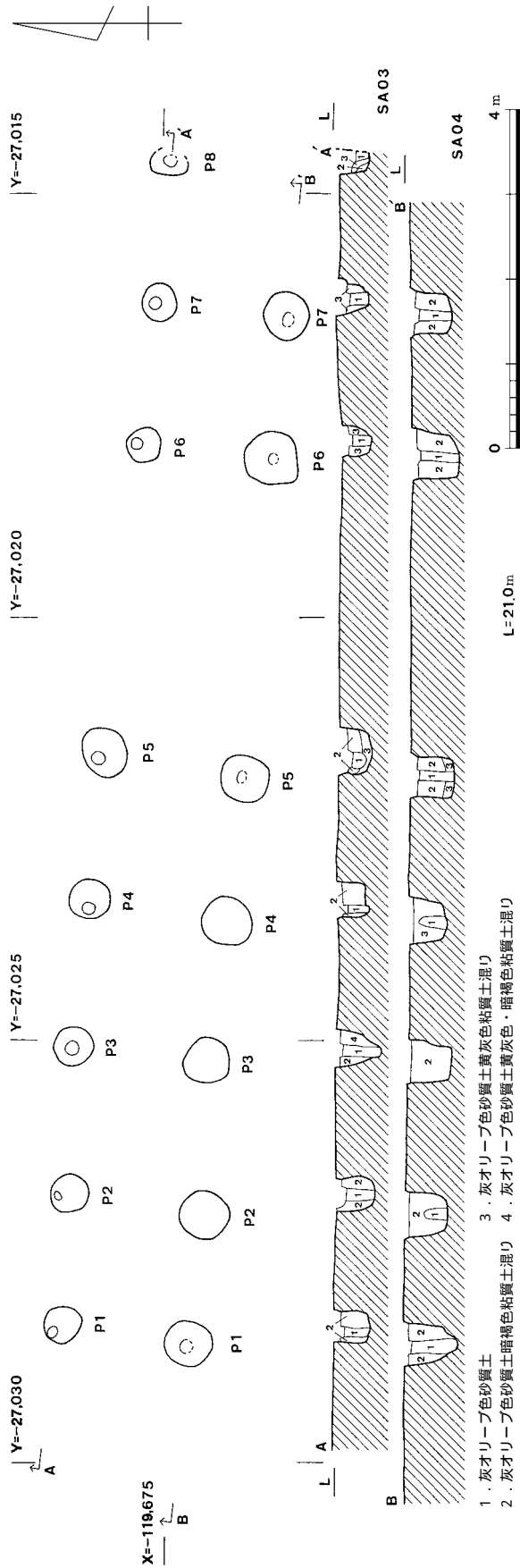
## 江戸時代の遺構

今回検出された江戸時代の遺構は、寛永十（1633）年に永井直清によって築かれた近世の勝龍寺城に関するものである。大半が柵列で全部で7条、他に土坑1基と小ピットが認められる。柵列としたものの中には部分的な検出のため、他の施設の可能性があるものも含んでいる。なお、第6図で示している溝SD01は、竹藪の地境溝と見られるもので勝龍寺城の遺構ではない。幅0.6m、深さ0.15mで、埋土は暗灰オリーブ色砂質土2（第7層）である。第5図のトレンチ東壁の断面図で明らかのように、この溝は竹藪土入れが行われた後も同じ場所に作られている。

柵SA02 調査地の北西隅で検出されたもので、2基の柱掘形が確認できた。西側のP1は直径約0.65m、深さ約0.25mで、底部に0.3m前後の石を2個入れている。東側のP2はトレンチの北壁にかかっているため直径は不明であるが、P1とほぼ同規模と見られる。深さは約0.3mで、P1と同様に底部に石が入られているが数や大きさは確認できない。両柱掘形ともに内部



第6図 江戸時代検出遺構図(1/150)

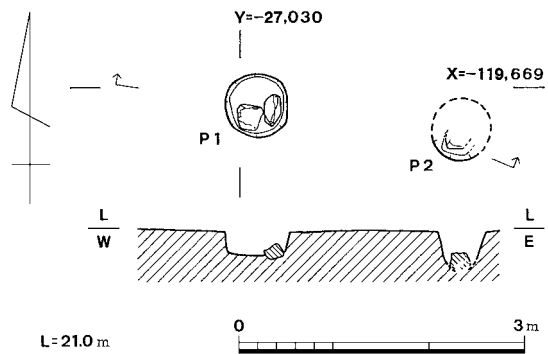


第7図 柵S A03・04実測図(1/80)

に明確な柱穴は認められなかったが、中心からの距離は約2.1~2.2mである。S A02は柵列としているが他の柵列の柱掘形と比べるとかなり浅く、また底部に石を持つ点でも異なっている。したがって別の施設になる可能性も考えられるものである。

柵S A03 調査地中央北寄りで検出された東西方向の柵列である。合計8基の柱掘形が確認されたが、西側5基(P1~P5)と東側3基(P6~P8)の間は出入口状に間隔が広がっている。また西側と東側では柱筋がまっすぐに通らず若干ずれている。柱掘形の直径は大半のものが0.4~0.45mで、P5のみ直径0.55mと一回り大きい。深さは浅いもので0.35m、深いもので0.5mあり、近世勝龍寺城の柱掘形としては比較的大きな部類になる。内部にはいずれも柱穴が確認でき、直径は0.15mである。柱間は約1.7mで、出入口状に途切れた部分では3.75mである。

柵S A04 柵列S A03のすぐ南に並行して検出された柵列で、7基の柱掘形を確認している。柱掘形の直径は0.55~0.6m、深さは0.5~0.65mで、S A03よりも一回り大きく、また深くなっている。柱穴は当初上面で良好に認識できなかったため断ち割りをいれ、断面で確認できたものが多い。直径は0.15mである。柱間は



第8図 柵S A02実測図(1/80)

- 1. 灰オリーブ色砂質土
- 2. 灰オリーブ色砂質土・暗褐色粘質土混り
- 3. 灰オリーブ色砂質土・黄灰色粘質土混り
- 4. 灰オリーブ色砂質土・黄灰色・暗褐色粘質土混り

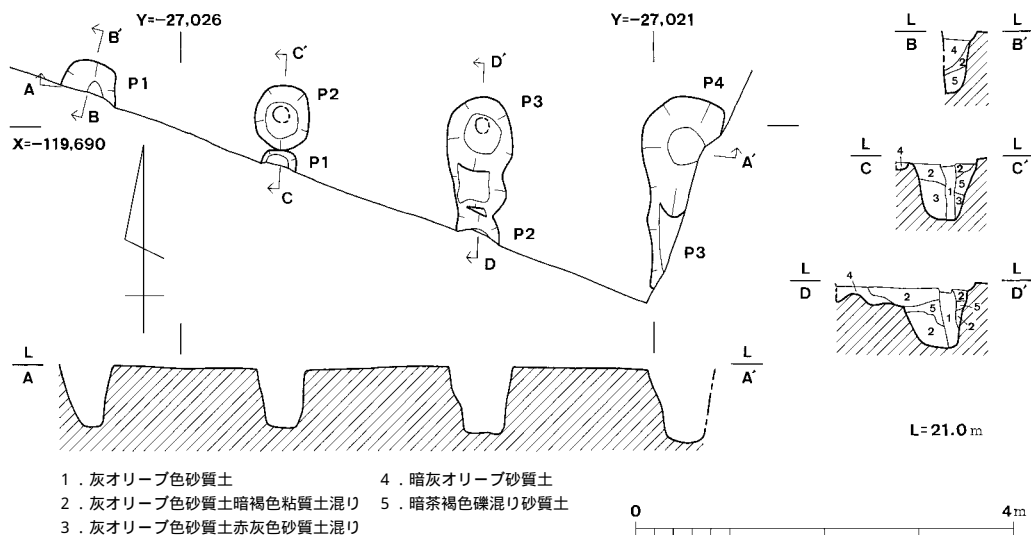


る。内部に残る柱跡は直径0.15mで、柱間は2.1~2.2mであり、S A 03・04と比べるとやや広くなっている。またS A 05との間隔は、確認できる柱の心々間で約1.5mで、この数値はほぼ同じとなっている。

土坑S K 07 東西方向の柵列S A 04の南側に接する形で検出された、東西方向の平面長楕円形を呈する落ち込みである。検出当初は土坑と認識していたため、半分に断ち割りを入れたところ断面で柱跡が確認され、布掘りされた2基の柱掘形であることが判明した。東西1.45m、南北0.55mで、中央部が深さ0.4m、西側の深い部分は0.65m、東側は0.7mである。柱跡は西側の断面でのみ確認でき、東側では確認できていない。したがって東側の柱は中心よりも南よりに設置されていたものと推定される。断面で確認できる西側の柱の直径は約0.2mで、推定される東側の柱との心々間距離は約0.7mである。これらは他の柵列に比べると深く掘り込まれており、柱もやや太く、さらに近接して布掘りされていることなど相違点が多い。現段階では断定できないが、旗竿のような高く建てる柱の支柱のようなものが推定できる。

柵S A 08 調査地南東隅で検出された東西方向の柵列である。どれもS A 09の各柱掘形と布掘りされていて、検出時はすべて南北方向の長楕円形を呈する掘形であった。これらを0.1~0.15mほど掘り下げると円形の柱掘形が確認できた。東側のP 4が最も大きく直径約0.8m、西側のP 3が直径約0.7m、P 1・2が約0.6mである。深さはいずれも0.7mで、検出された柵列の中では最も深い。柱穴が確認できたP 2・P 3では直径約0.15mで、柱間は2.1mである。

柵S A 09 S A 08の南側で並行する形で検出された同じ東西方向の柵列であるが、調査トレンチの壁面にかかっているため、良好な状態では確認できなかった。先にも述べたように布掘りされているが、調査地内では柱掘形の落ち込み部分が一部確認できたのみで、柱跡は検出されていない。ただし全体に小振りであり、他の柵列と同様一回り小さなものかと思われる。したがってS A 08との距離は不明であるが、東側のP 4・P 3の断面状況と合わせ、おそらく1.5~1.6mの間隔であったものと推定される。



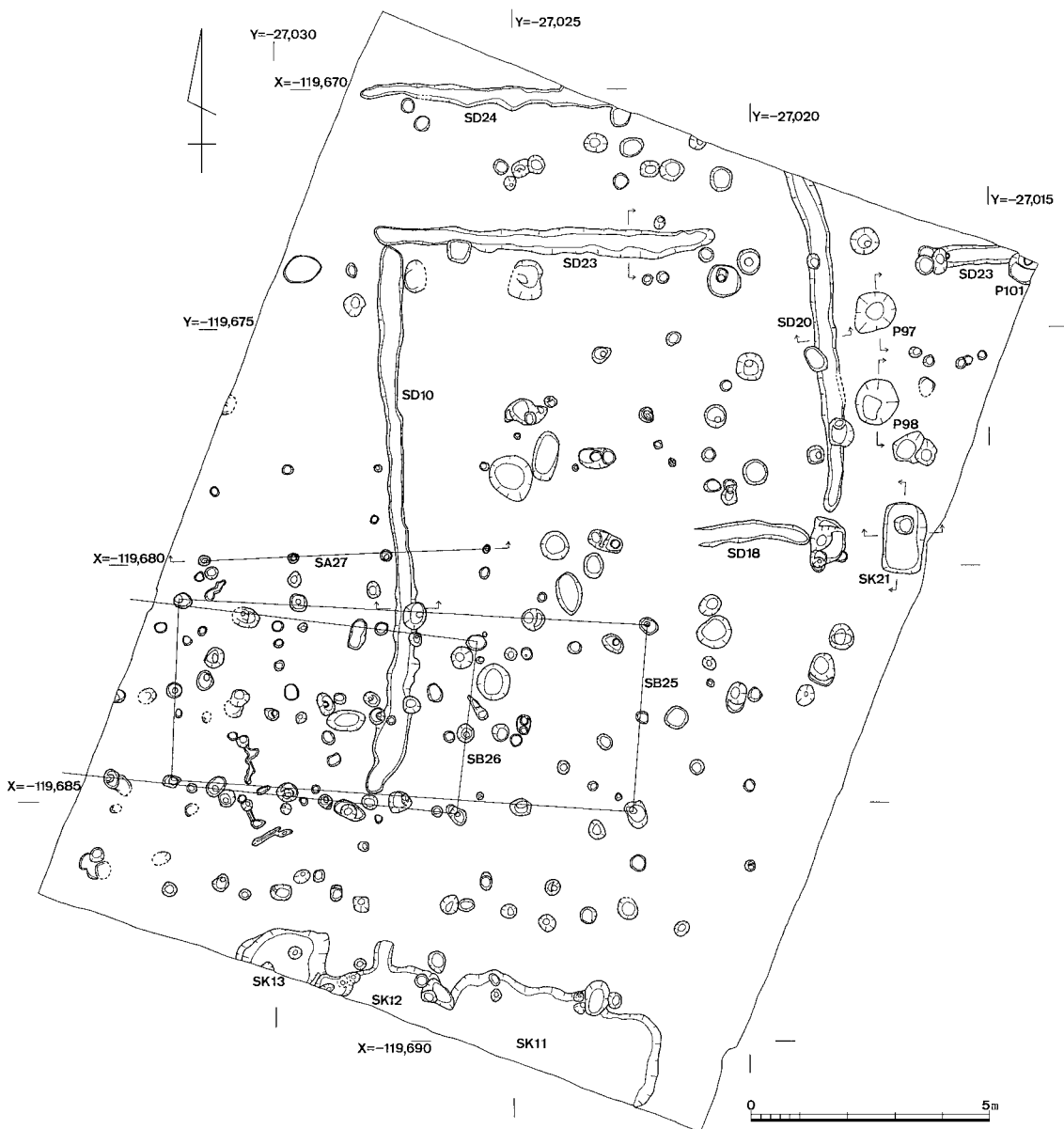
第11図 柵S A 08・09実測図(1/80)



## 鎌倉時代の遺構

調査地内では鎌倉時代の遺物包含層が部分的に存在するものの、全体に出土量は多くなく、また遺構でも同様の傾向で、土師器の小片のみが出土している遺構では、平安時代や長岡京期との区別が不明瞭なものも多い。ここでは比較的明確に捉えられたものを中心に述べる。

土坑 S K 11・12・13 調査地南辺部で検出された土坑群で、東西方向に接続しており、一連の遺構とも見られる。東側の S K 11は、平面隅丸長方形を呈するもので、東西約4.5m、南北は2m以上。底部は平坦で、深さは0.3mである。西側に隣接する S K 12は平面不整円形で、東西約2.5mで、深さは0.2m、S K 13も不整円形を呈し、東西部分で約2m、深さは0.2mである。いずれも切り合いは確認できず、埋土も同一の暗茶灰色粘質土（第13層）であった。全体に鎌倉時代の瓦器・土師器・白磁などの小片を含む量は多いものではない。また部分的に炭を含むことから、塵芥処理用の土坑かと思われる。



第12図 鎌倉・平安時代検出遺構図 (1/150)

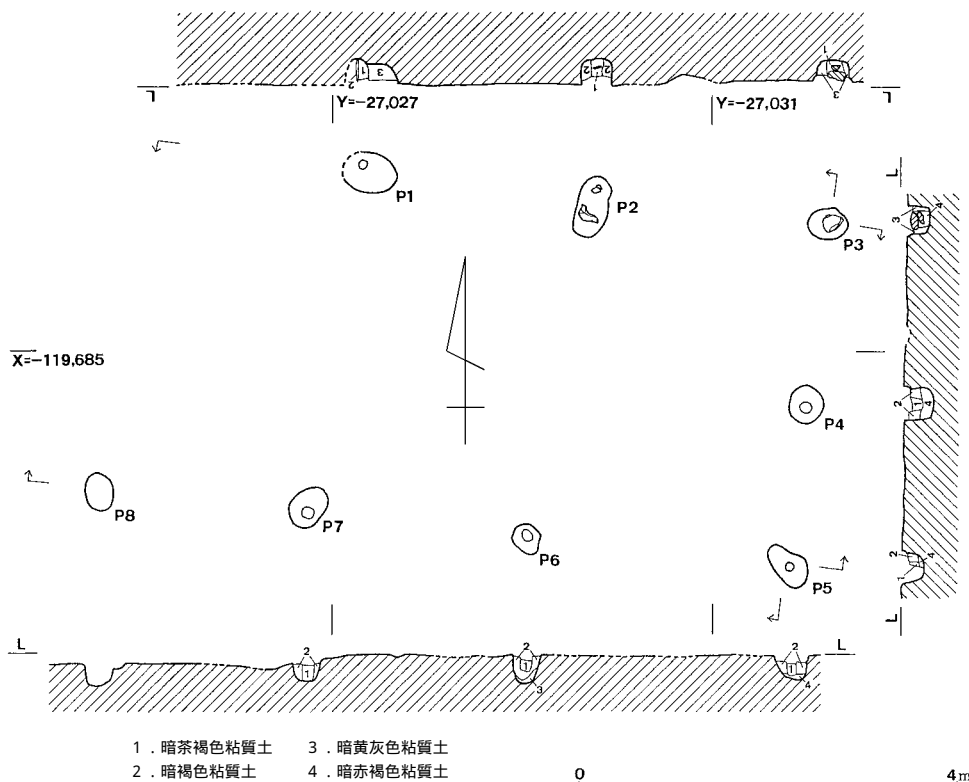
溝 S D 10・18・20・23・24 調査地北半部を中心に検出された東西・南北方向の小溝群である。南北方向の溝 S D 10と溝 S D 20は約 9 m の間隔で、わずかに湾曲する。ともに幅 0.5 m 前後、深さ 0.1 m で瓦器片などを含むことから鎌倉時代と判断したものである。

東西方向の溝 S D 18・23・24は幅約 0.5 m 前後、深さ 0.1 m で、S D 23は部分的に途切れている。北側の S D 24とその南にある S D 23の距離は約 3 m、S D 23と南側の S D 18の距離は約 6 m である。遺物は全体的に少なく南北方向の溝とはやや状況が異なる。区画溝あるいは耕作に伴うものと思われる。

掘立柱建物 S B 26 調査地南半部で検出された東西棟の掘立柱建物で、南北 2 間、東西 3 間以上の規模を持つ。柱掘形は円形ないし不整楕円形を呈し、径約 0.4~0.5 m 前後で、深さは 0.3 m である。このうち P 2のみ南北方向に大きく、長径 0.65 m となる。柱跡は、確認できたものでは直径約 0.1 m 前後と細いもので、柱間は南北が 1.7 m、東西は不揃いで 2.4~2.7 m である。また北側の柱列の P 2、P 3では内部に石が据えられている。石はいずれも砂岩の自然石で、加工したような跡は認められない。P 3では平らな面を水平に置いているようであるが、柱跡底部よりも約 0.2 m 高い位置になる。同様に石を据えたピットが調査地内から数基検出されており、一部には砥石として利用されていたものも認められる。

#### 平安時代の遺構

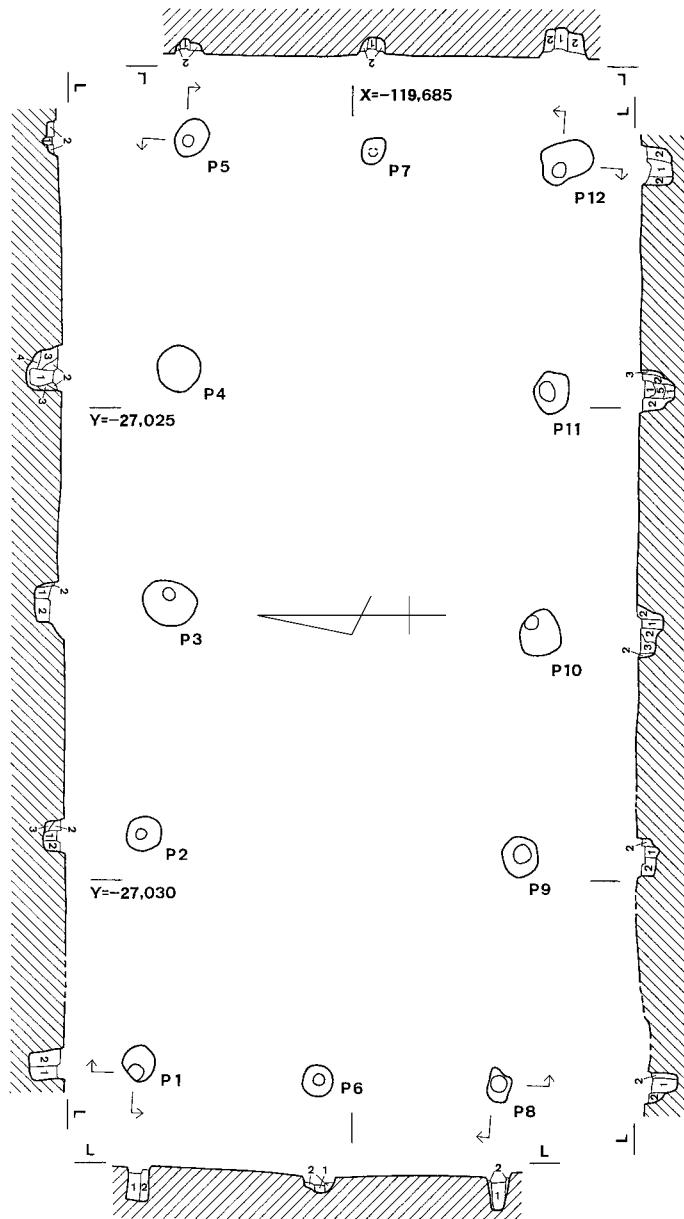
掘立柱建物 S B 25 調査地南半部で鎌倉時代の掘立柱建物 S B 26と重複する形で検出された。同じく東西棟であるが振れ角が異なっており、正方位に近いものである。南北 2 間、東西 4 間



第13図 掘立柱建物 S B 26実測図 (1/80)

で、柱掘形は円形ないし不整隅円方形を呈する。大きさは不揃いで、小さなものでは径約0.3m、大きなものでは0.6m前後となる。内部には柱跡が比較的明瞭に残り、直径は約0.15m、柱間は南北が1.95m、東西は約2.4mとなっている。複数の掘形内部からは、緑釉陶器、黒色土器B類椀などの小片が出土しており、平安時代の遺構と判断したものである。ちなみに、S B 25の南約2mの付近には、建物の方位と同じピットの並びが認められ、廂あるいは柵列になる可能性のものがある。ただ、出土遺物が小片、少量であるため明確にすることができなかった。

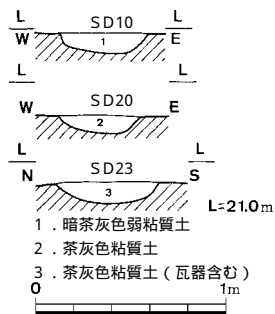
柵 S A 27 調査地中央西寄り、掘立柱建物 S B 25の北側で検出された小規模な柵列である。方位は S B 25とは異なり、ほぼ正方位を指向する。柱掘形は直径0.15~0.25m、深さは0.15~0.3mで、内部には直径約0.1mの柱跡が認められる。柱間は東側1間分が2.1m、その他は1.9mで、小さい掘形ながら、内部から黒色土器などの遺物が出土したことから平安時代と判断したものである。



- 1. 暗茶褐色弱粘質土
- 2. 暗褐色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土黄褐色粘質土混り
- 4. 暗茶褐色粘質土黄褐色粘質土混り
- 5. 暗茶灰色砂質土

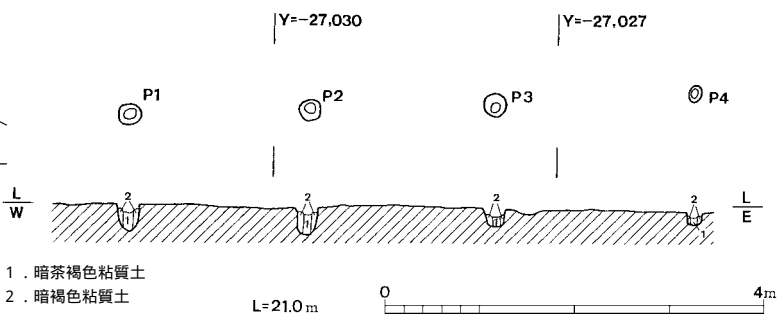


第14図 掘立柱建物 S B 25実測図 (1/80)



- 1. 暗茶灰色弱粘質土
- 2. 茶灰色粘質土
- 3. 茶灰色粘質土 (瓦器含む)

第15図 溝 S D 10・20・23実測図 (1/40)

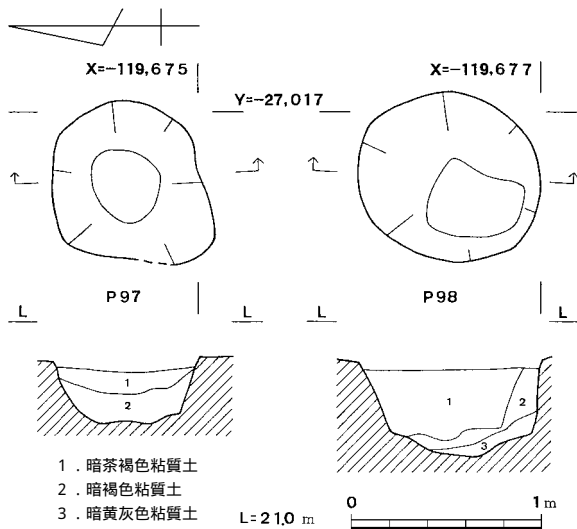


- 1. 暗茶褐色粘質土
- 2. 暗褐色粘質土



第16図 柵 S A 27実測図 (1/80)

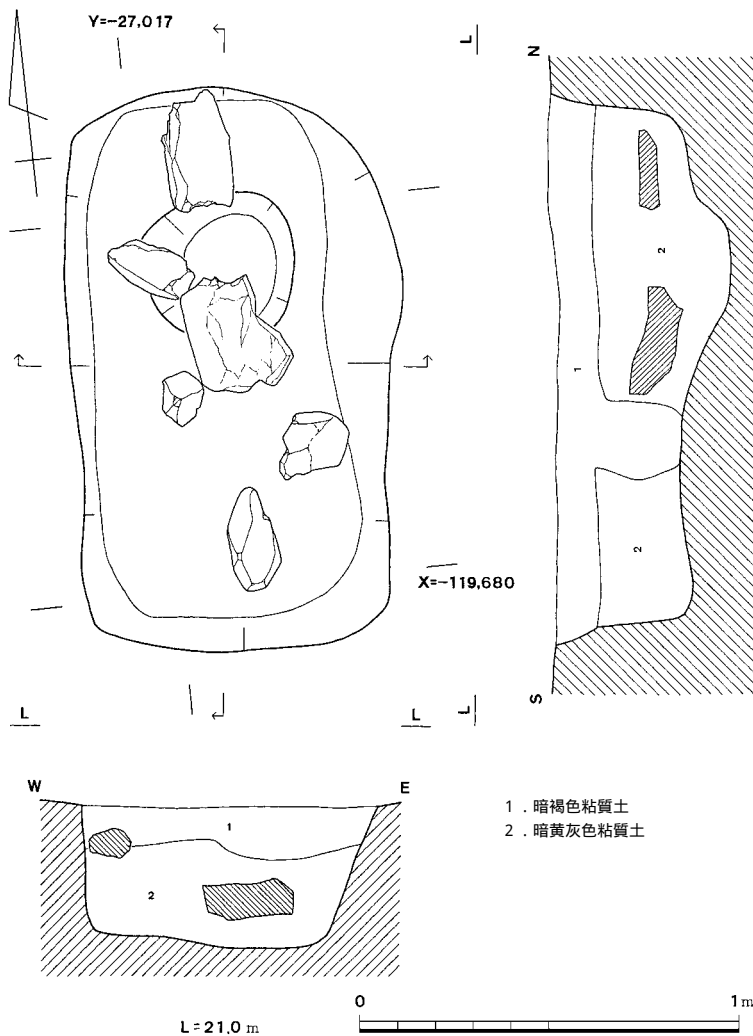
P97・98 調査地北東隅で2基並んで検出された平面円形ないし不整円形を呈する土坑状の落ち込みである。北側のP97は、南北0.8m、東西0.85m、深さは0.35mで、播鉢状に落ち込む。



第17図 P97・98実測図 (1/40)

埋土は2層で、柱跡あるいは特別な施設や堆積状況は認められない。遺物は少量であるが、炭を若干含んでおり、塵芥処理用の施設かとも思われる。なお壁面などに火を受けたような痕跡は確認できていない。

P98はP97の南約1mに位置し、平面はほぼ円形に近い。北東部は比較的なだらかで、南西部はほぼ垂直に落ち込み、底部は丸く凹んでいる。埋土は3層で、南西部からの流入土が堆積している。遺物は少量で埋土に炭を含んでいることから、P97と同様の性格を有するものと見られる。



第18図 土坑 S K21実測図 (1/20)

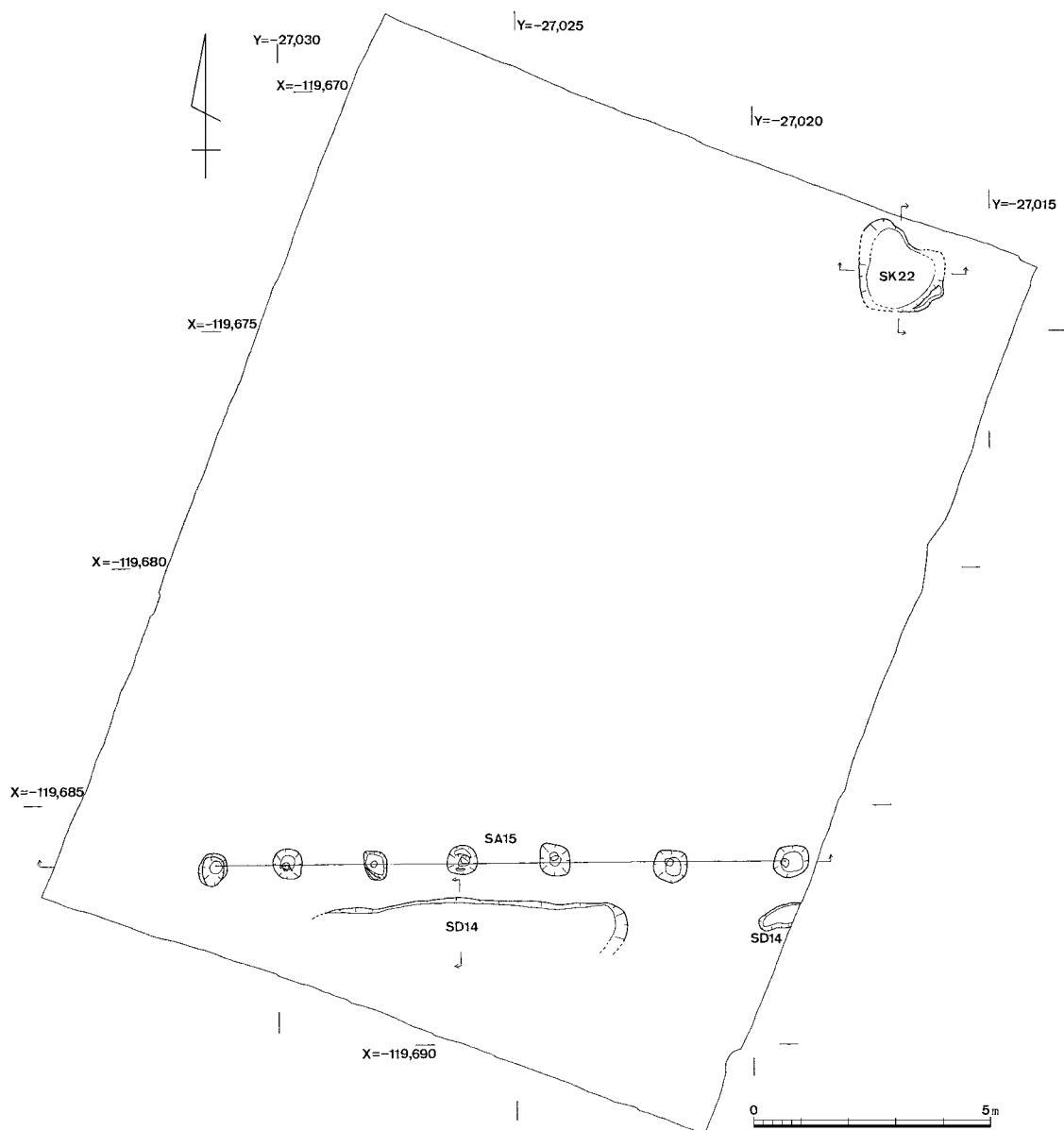
土坑 S K21 調査地東辺部で検出された南北に長い平面隅円長方形の土坑である。南北1.5m、東西0.9m、深さは0.35mで、底部北寄りでは円形に一段約0.1mさらに深くなる。埋土は2層で中央付近で上層が落ち込んでいるが、その他には木棺などの存在を示すような堆積状況は認められなかった。内部には底部より浮いた状態で6個のチャートの割石が見られるが、遺物は約1cmほどの土師器片が1点出土したのみである。形態から見て、おそらく土壌墓と考えられるものであるが断定するには至らない。また上記の如く時期決定が困難で、平安時代としたが、鎌倉時代の可能性もある。



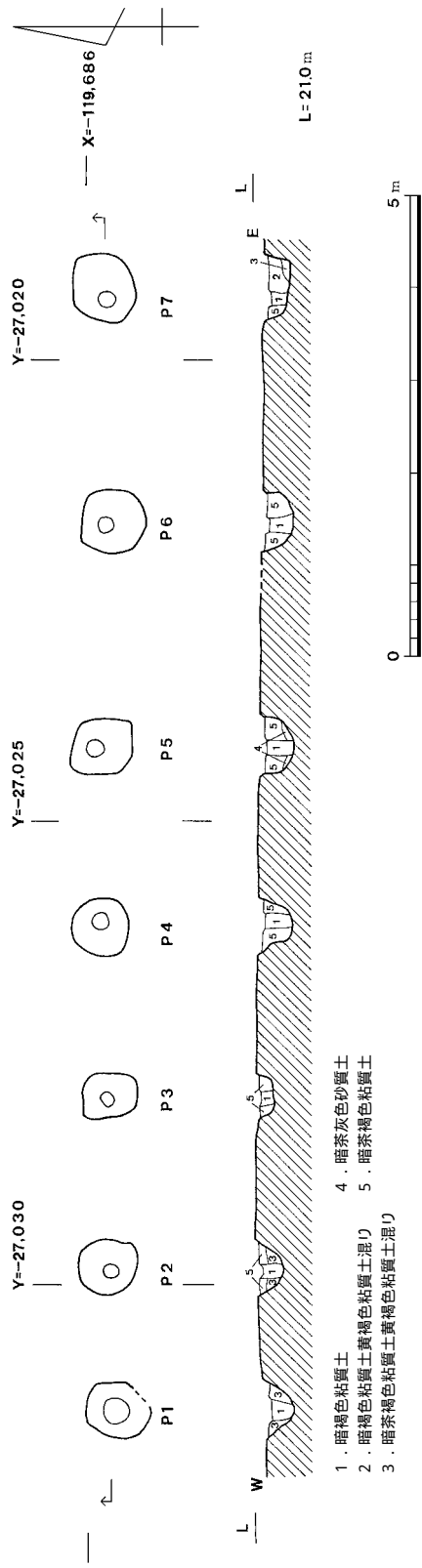
## 長岡京期の遺構

今回の調査で明確に長岡京期の遺構と判断し得たのは、六条条間小路北側溝と柵列そして土坑のみであった。時期判断が困難な遺構を考慮しても、掘立柱建物や井戸などは確認できなかった。当地は長岡京右京六条一坊七町にあたり、調査地南半部で六条条間小路北側溝が確認されたことから、大半は宅地内となる。朱雀大路に近い宅地としては遺構は非常に希薄であった。

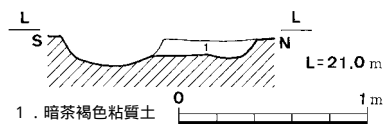
六条条間小路北側溝 S D 14 調査地南部で検出された東西方向の溝で、削平により深い部分のみが遺存しており部分的に途切れている。また近世の溝 S D 01などによって南肩の大部分が切られているため、遺存状況は極めて悪い。溝幅は東端部で約0.5m、中央部で0.8m以上、深さは0.1~0.2m、確認できた埋土は1層である。遺物は本調査地内では比較的大きな破片が出土しているが、遺存状況が悪いこともあり少量である。溝 S D 14は、これまでの調査で検出されている六条条間小路北側溝の座標データから、位置的に確認することができたものである。なお本調



第19図 長岡京期検出遺構図 (1/150)



第20図 柵 S A 15実測図 (1/80)

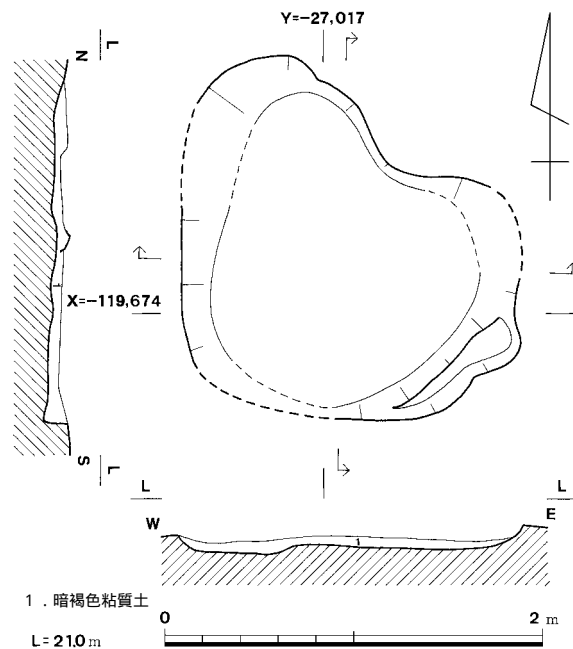


第21図 溝 S D 14実測図 (1/40)

査地の東端部における座標値は、 $Y = -27,019.2$  で  $X = -119,687.3$  である。ちなみに当調査地の西約100mの地点で行われた右京第609次調査<sup>(2)</sup>においても六条条間小路北側溝 S D 20が検出されており、その中心座標は、 $X = -119,687.8$  である。

柵 S A 15 六条条間小路北側溝溝 S D 14の北肩から約0.8m北側で検出された東西方向の柵列で、7基の柱掘形を確認している。平面形は隅円方形であるが、部分的に崩れて不整形を呈するものもある。一辺約0.6~0.7mで、深さは0.3~0.35m、P 3のみ0.15mと浅くなっている。内部には直径約0.15mの柱跡が残されており、柱間はP 1とP 2が1.5m、P 2~P 5が1.8m、P 5~P 7が2.4mと、東側に行くに従い間隔が広がっている。

土坑 S K 22 調査地北東隅で検出された浅い土坑である。鎌倉時代・平安時代の遺構に切られているが、南半部は隅丸長方形、北西部が突出した不整形な平面を呈する。東西は1.8m、南北は突出部を含めた西側で1.9m、東側では1.3m、深さは0.1~0.15mである。底部はほぼ平坦で、南東隅には小さな段が認められる。浅い土坑であるが、長岡京期の遺物が比較的まとまって出土しており、塵芥処理用の施設と見られるものである。

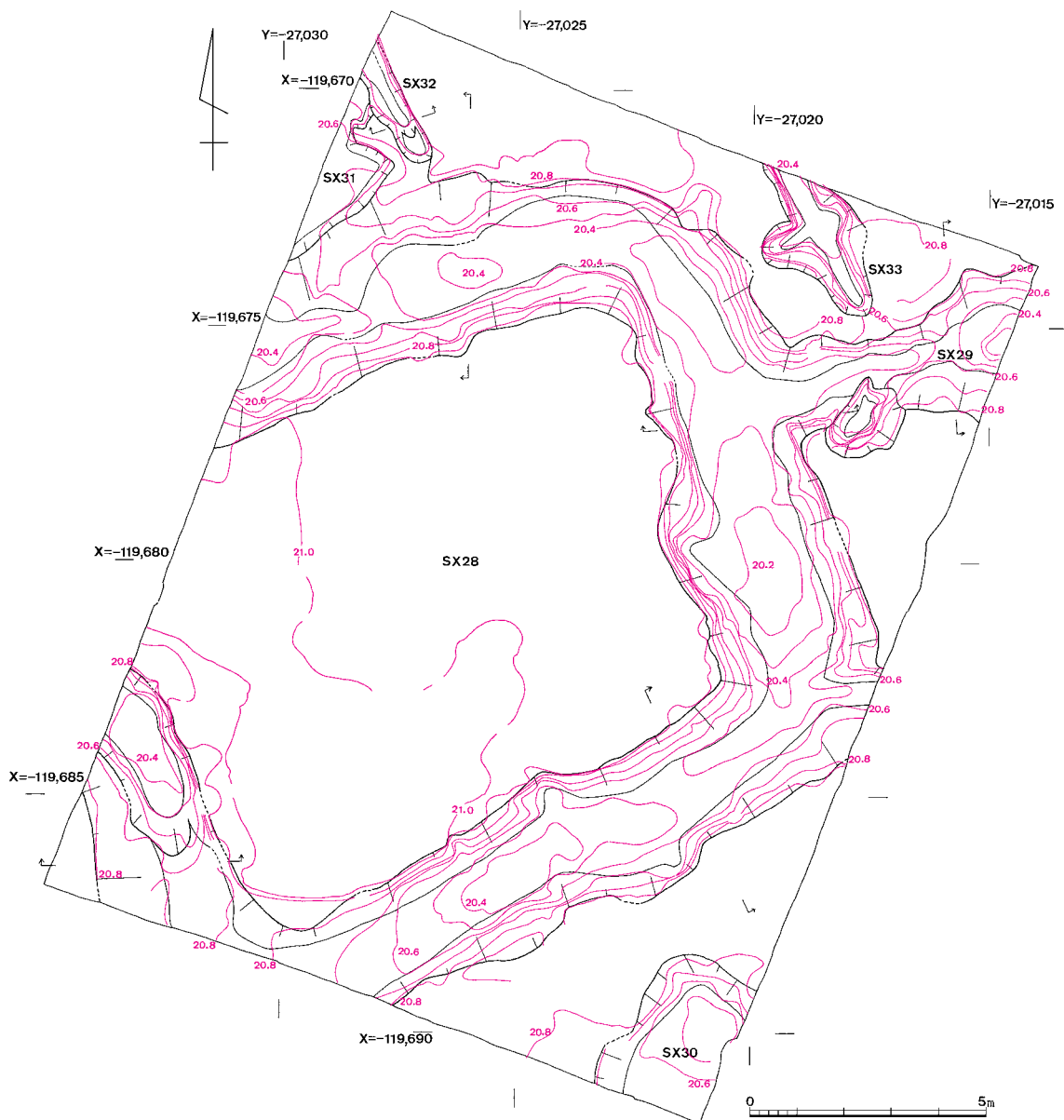


第22図 土坑 S K 22実測図 (1/40)

## 弥生時代の遺構

これまで行われた周辺の調査では、弥生時代の遺構として中期の方形周溝墓が多数検出されており、当地付近は神足遺跡の北部墓域と見られている。今回の調査においても予想通り方形周溝墓が検出され、不明なものも含め4～5基が確認できた。ただしいずれも埋葬施設などは検出されず、方形周溝墓以外の遺構も見つかっていない。

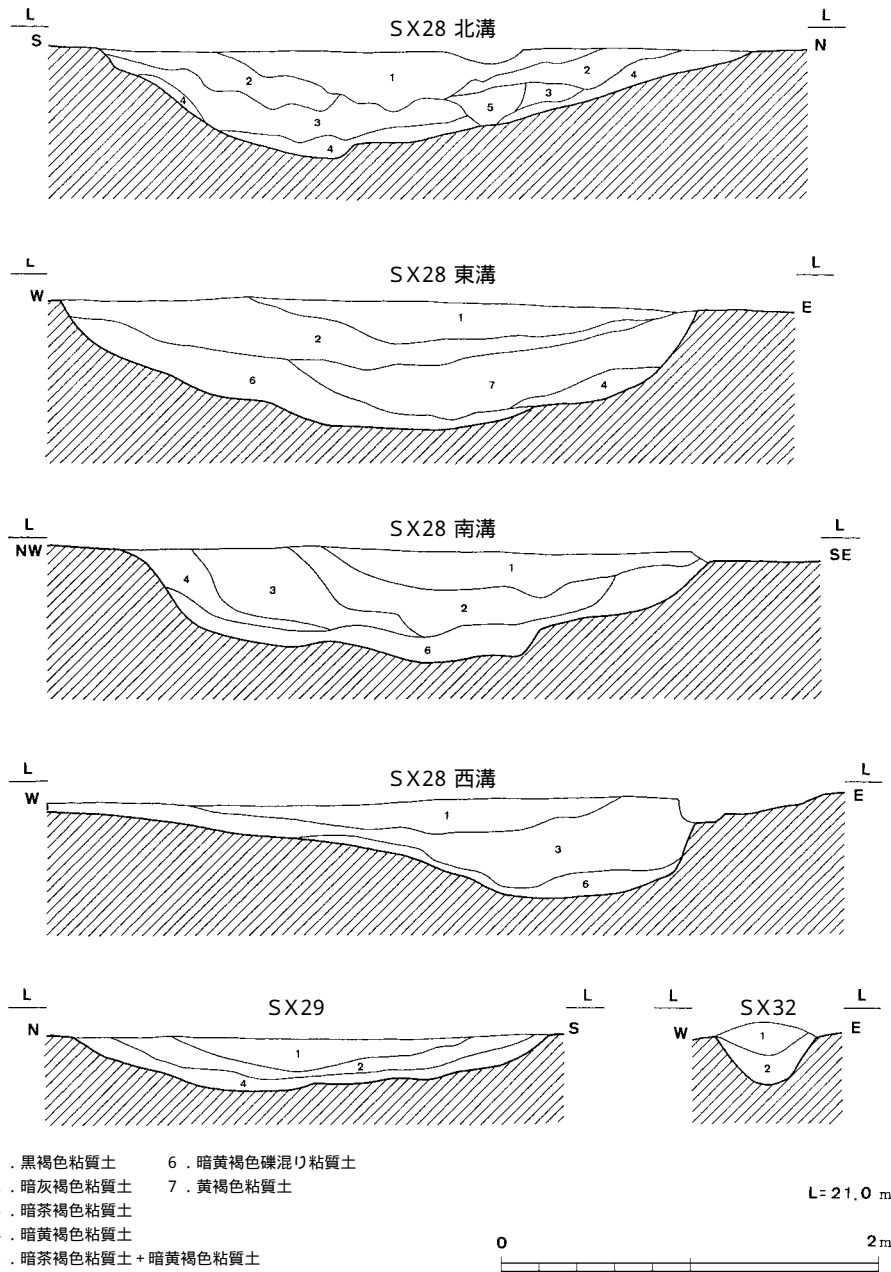
方形周溝墓S X28 調査地内のほぼ全域にわたって検出されたもので、平面はややいびつな長方形を呈している。西側コーナーは調査地外にあたるため未確認である。また東コーナーは外縁部分がさらに東側に広がるように見えるが、ちょうど調査トレンチ壁面にかかるため判然としない。周溝内側での規模は、南北が9.5m、東西が中央付近で12m、南辺部で11m、周溝外縁部では、南北約15m、東西17mである。周溝の幅は、南辺が2.5～2.7m、北辺3m、東辺3～3.5m、西辺が2.3～2.8mとなっている。深さは、南辺と西辺では中央部が特に深く約0.5～0.6m、東辺



第23図 弥生時代検出遺構図(1/150)

も0.5~0.6mであるが、中央がわずかに高い。東辺は全体に深くなっており約0.6~0.7mで、やはり中央付近がやや高くなっている。周溝内部の深くなっている部分では溝内埋葬を示すような痕跡や遺物、堆積状況は認められなかった。また南コーナー部は最も浅く0.2~0.3mであるが、これはこの部分に下層の段丘礫が顔を出しているために深く掘削が及ばなかったためとみられ、陸橋部のようなものとは考えにくい。埋土は断面観察より、墳丘側の流入土が大半を占めるが、内部には供献状態を示すような遺物はなく、全体的に土器も少量で小片が多い。

周溝 S X 29 調査地北東部で検出されたもので、方形周溝墓 S X 28 の東側周溝中央付近と接続するが、明確な切り合い関係は認められなかった。おそらく溝を共有した方形周溝墓と見られるが、どちらに広がるかは不明である。ただ北側にある周溝 S X 33 が別の方形周溝墓の一部だとす



第24図 方形周溝墓 S X 28、周溝 S X 29・32断面図 (1/40)

れば、南東に広がる可能性がある。西側の接続部付近で周溝幅は2 m、深さ0.4~0.5m、東側で幅は広くなり2.7m以上、深さは0.5mである。埋土は3層で、遺物は非常に少量かつ小片であった。なお南肩にある不整形の落ち込みは時期の異なるしみ込みである。

周溝 S X 30 調査地南東隅で検出された周溝と見られるもので、方形周溝墓 S X 28南辺部に隣接するが途切れており、周溝 S X 29のように接続していない。江戸時代勝龍寺城の柵 S A 09に切られており、また部分的な検出のため幅などは確認できないが、深さは0.4mで、検出部分で円形に深くなっている。遺物は他と同様に少量、小片である。

周溝 S X 31 方形周溝墓 S X 28の北辺に接して検出された落ち込みである。埋土が S X 28・S X 32と共通しており、切り合いなどは確認できなかった。深さは0.3mで、S X 28と溝を共有する方形周溝墓の可能性が考えられる。東にある S X 32との位置関係からみて、北西に広がるものと見られる。遺物は S X 28と明確に分別できていない部分があるが、全体に非常に少量であった。

周溝 S X 32 S X 28の北側で検出された幅0.6~0.7m、深さ0.3mの小規模な方形周溝墓の一部と見られるものである。これまで述べた S X 28などと方向は同じであるが、溝幅、深さともに異なっている。中からは横倒しになった状態でほぼ完形の壺が出土しており、おそらく墳丘上或いは裾部にあった供献土器が転落したものと見られる。当調査地の南で行われた右京第494次調査<sup>(3)</sup>では S X 28と同様の規模、溝幅を持つ方形周溝墓が検出されているが、東側の右京第382次調査<sup>(4)</sup>では一辺6~7mで溝幅も狭い方形周溝墓の一群が確認されており、S X 32はそちらに類似している。したがって時期差など不明な点はあるが、大きさの異なる方形周溝墓が群を形成していたことが解る。

周溝 S X 33 S X 28と S X 29の接続部北側で検出された幅約1 m、深さ0.6mの溝で、やはり S X 32と同じ一回り小さな規模の方形周溝墓と見られる。S X 32と同一の方形周溝墓の一部とするとかなり長方形となるため別の遺構の可能性が高い。他とは異なり遺物はまったく検出されなかった。なお直交する形の短い突出部は時期の異なるしみ込みである。

#### 4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナにして8箱と神足遺跡の調査としては少ないほうであった。また検出遺構でも述べた如く、小片が多いため、図示できる遺物も少ない。遺物は明確に時期区分のできないものを含んでいるが、鎌倉時代のものが多く、次いで長岡京期、弥生時代、平安時代の順で、江戸時代勝龍寺城の遺構から出土したのは1点のみであった。

##### 江戸時代の遺物（第25図）

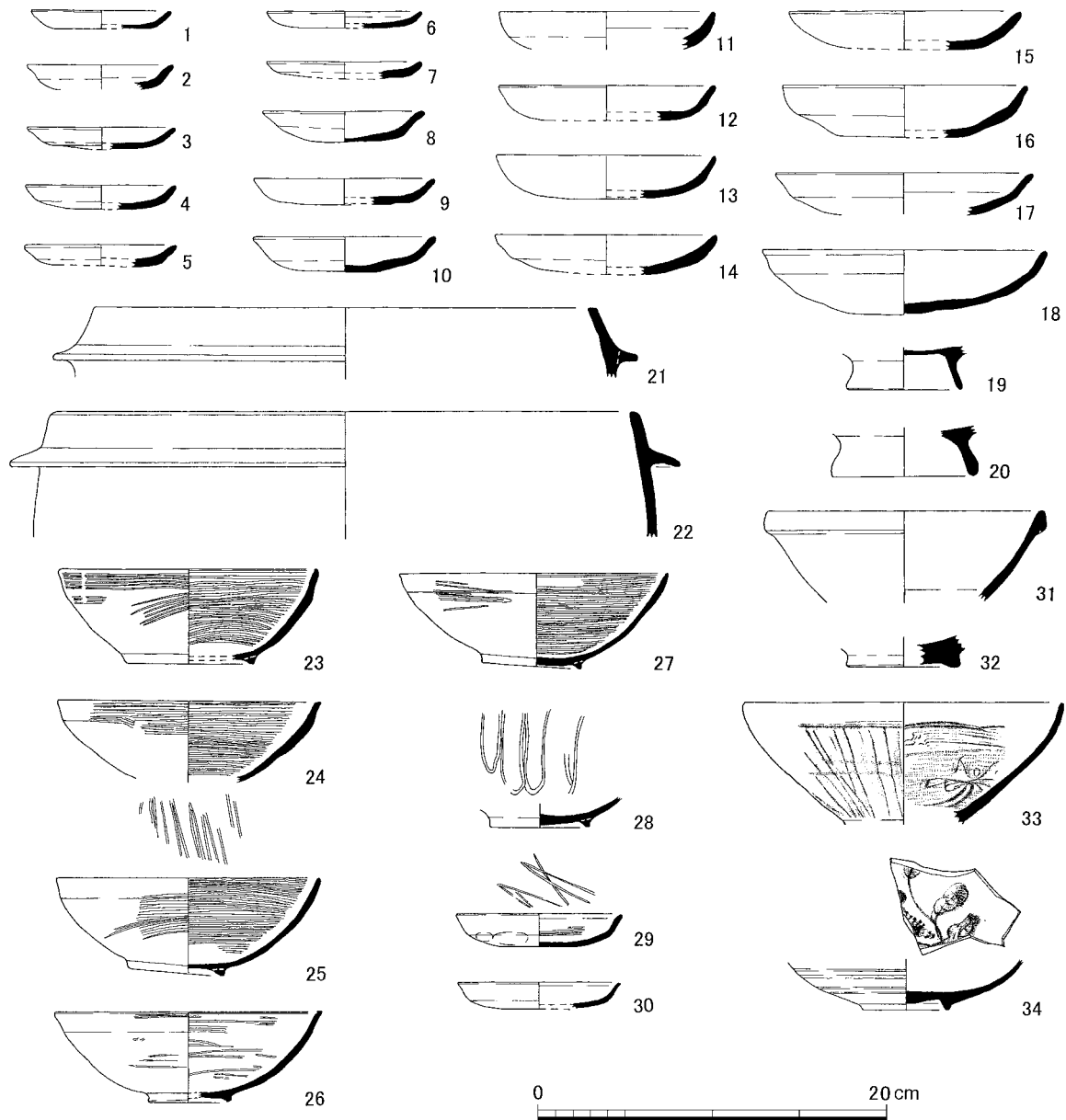
肥前系磁器の皿（34）が柵 S A 04の P 2 から出土している。ロク口整形の後、花形に作るための凹みが縦方向に1条残る。内外面施釉され、見込みに草花文を描く。ケズリ出しによる高台の径は4.7cmで、接地面は釉剥ぎされ、周囲に砂の付着が見られる。砂目積みの跡が見られることから、寛永十（1633）年の江戸時代勝龍寺城に伴うものと見て大過ないものと思われる。



鎌倉時代の遺物（第25図）

調査地内ではほぼ全域から遺物が出土するが、図示できるものは多くない。土坑出土のものが大半を占め、他にピット、溝から少数出土している。

土坑 S K 11・12・13出土遺物 東西に接続した土坑群で、検出遺構でも述べた如く一連の遺構の可能性があり、まとめて述べることにする。土師器皿には口径8.4cmのもの（2）、口径10cm前後、器高2cm前後のもの（8～10）、口径12.6cm、器高2.5cmのもの（13）、口径14cm、器高3cmのもの（16）、口径16.2cm、器高3.7cmのもの（18）がある。いずれも口縁部と内面をヨコナデ



34 - SA04 9・19・27・32 - SK11 24・25 - SK12 2・8・10・13・16・18・20・23 - SK13 26 - SD20  
 12 - SD23 3・5・7・22・31 - SB26 6 - P7 11・21 - P10 33 - P18 15 - P50 17・29 - P76 1・4 - P137 30 - P138  
 1 - 22 - 土師器 23 - 30 - 瓦器 31・32 - 白磁 33 - 青磁 34 - 染付

第25図 出土遺物実測図 - 1 (1/4)

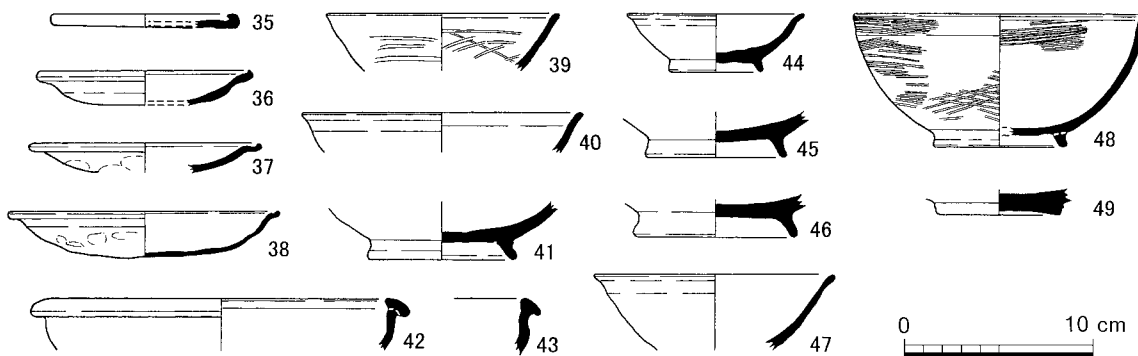
し、底部外面は不調整とするものである。19・20は皿につく脚台部で、19は脚台径6.6cm、20は少し厚めで脚台径8.2cmである。瓦器椀は口径15~15.5cm、器高5.6~5.7cmで、内面には密に、外面上半部にやや粗いヘラミガキを施す。底部には断面三角形の高台を貼り付ける。口縁端部内面に浅い沈線を持つもの(23・27)と持たないもの(24・25)がある。32は白磁碗の高台部片で、胎土は淡黄灰色、内面に乳白色の釉がかかる。高台径は6.6cmである。

掘立柱建物S B 26出土遺物 土師器皿は、口径8.6~9cm、器高1cm前後のもの(3・5・7)がある。22は土師質の羽釜で、摩滅が著しく、調整は看取できない。内湾する口縁部と下方に突出する鐔からなる。口径32.8cmである。31は玉縁を持つ白磁の碗で、内面と外面上半部に施釉している。口径15.5cmである。

その他の出土遺物 土師器皿は口径8~9cm、器高1cm前後のもの(1・4・6)、口径12cm、器高2cm前後のもの(11・12)、口径13~14cm、器高2cm前後のもの(15・17)がピットや溝から出土している。21の羽釜は、内傾する口縁部と短く下方に伸びる鐔を持ち、口径は29cmである。26は瓦器椀で、口径15.4cm、器高5.3cm。内外面をヘラミガキし、口縁端部内面に沈線を施す。29・30は、瓦器の皿で、口径9.3~9.5cm、器高1.5~2cmで、口縁部内面は横方向のヘラミガキを行い、底部外面は不調整である。29は見込み部分に粗い暗文を施している。33はピット出土の同安窯系と見られる青磁の碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に開く。外面には片切彫りの直線を縦方向に施し、内面は櫛状の施文具で「之」字型に施文した後片切彫りで花文を入れている。口径18.2cmである。

#### 平安時代の遺物(第26図)

溝、土坑、ピットなどから出土が見られるが全体に少量で、図示できるものも少ない。また鎌倉時代の遺構から出土しているものも多い。土師器皿にはコースター状のもの(35)と、口縁端部を強いヨコナデによって外湾させるもの(36~38)がある。35は口径9.1cm、器高0.8cm、36・37は口径11.4~11.8cm、器高1.8cm、38は口径14.3cm、器高2.5cmである。須恵器には椀(39~41)と鉢(42・43)がある。椀は内湾気味に開く口縁部を持ち、39は口径12.2cm、40は14.6cmである。41は底部の破片で、大きく広がる高台を持つ。高台径は6.8cm。39と41は内面に粗いミガ



41・42・44~47 - SD10 35・36 - SK13 38 - SB25 40・49 - P98 37 - P101 43 - P110 39 - P112 48 - P125  
35~38 - 土師器 39~43 - 須恵器 44~47 - 灰釉陶器 49 - 緑釉陶器 48 - 黒色土器

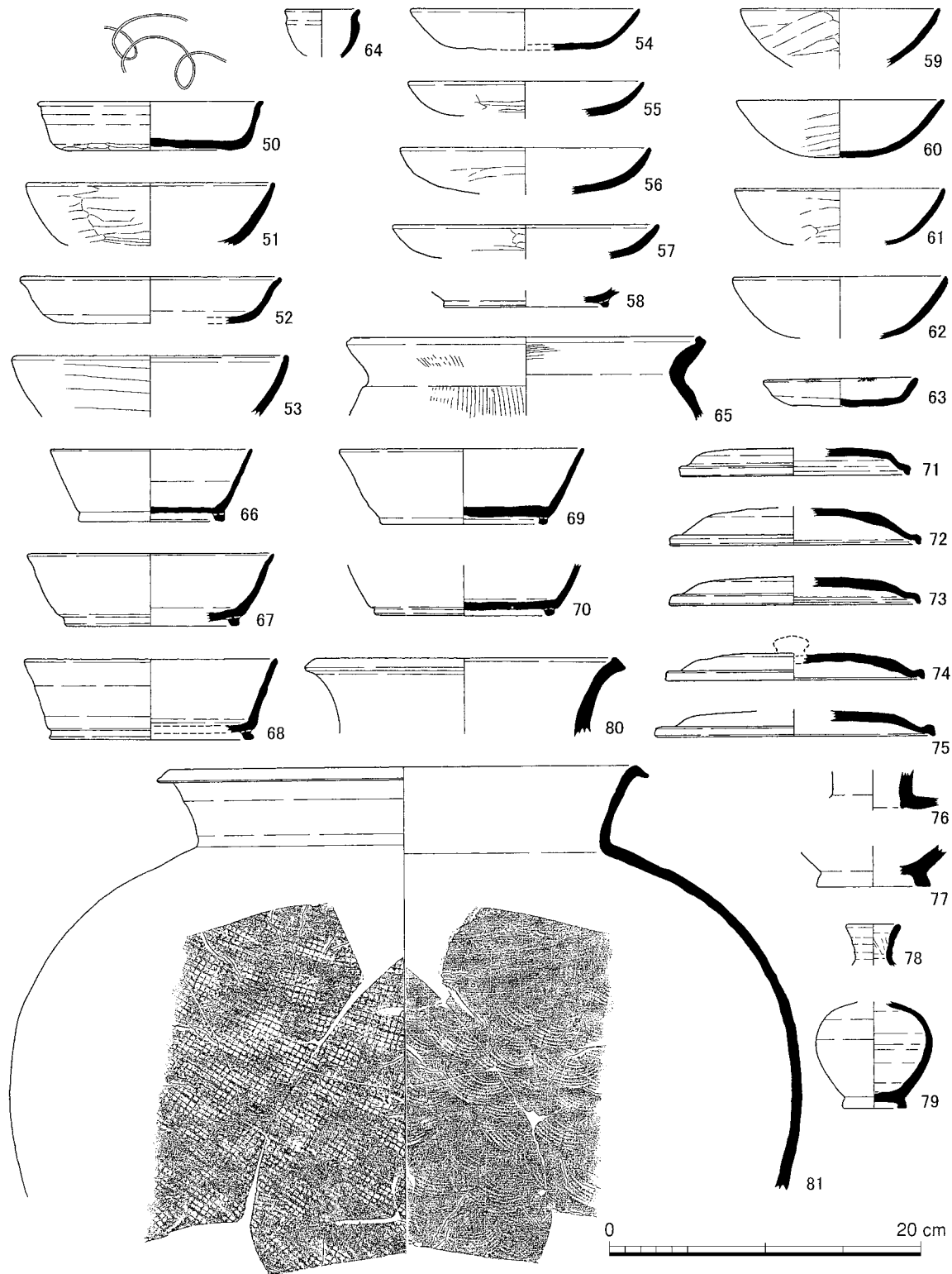
キを施しているが施釉は認められない。鉢はいずれも口縁端部を肥厚させて玉縁にしたもので、42は口径20cmに復元される。灰釉陶器はいずれも椀で、体部は内湾しながら広がり口縁端部はわずかに外反する。44は唯一全形が判明するもので、口径9.4cm、器高3.1cmの小型のものである。内面全体に釉が認められる。45・46は底部の破片で、大きく張り出す高台部を有する。45は高台径7.5cm、46は8.9cmで、見込み部分に釉は認められない。47は口縁部の破片。口径12.8cmで内面に施釉する。49は緑釉陶器で高台部分のみの破片のため器形は不明。ケズリ出しによる広い高台部を有し、内側にわずかに凹む。素地は暗灰色に焼き上がり、内外面に淡緑色の薄い釉がかけられている。48は黒色土器B類の椀で、口径15.3cm、器高7.0cmで、内湾する体部を有し、やや深めのものである。底部には角形の高台を貼り付け、口縁端部内面には沈線を巡らせる。内外面ともに横方向に密なヘラミガキを施すが、内面は摩滅しており見込みの状況は看取できない。体部外面にはヘラミガキの下にヘラケズリが施されている。

#### 長岡京期の遺物（第27図）

六条条間小路北側溝S D 14出土遺物 長岡京期の遺構の中では遺物が最も多く、土師器では皿A、椀A、杯B、ミニチュア甕がある。皿A（55～57）はいずれも外面ヘラケズリするc手法で、口径は15～17cmである。椀A（59・61・62）もすべてc手法で仕上げられており、破片のため器高は不明であるが、口径12.7～13.6cmである。杯B（58）は高台径約10cm、底部のみの破片である。土師器の蓋は確認されていない。ミニチュアの甕（64）は口縁端部を外反させ、内面及び口縁部はナデ、体部外面は不調整である。口径4.8cmで、底部を欠く。外面には黒斑が残る。

須恵器には杯B、杯蓋、平瓶、甕がある。杯B（67・69・70）のうち67は口径15.8cm、器高4.7cm。体部下半は丸味を持ち、口縁端部は外反する。69は直線的に開く口縁部を持つもので、口径15.6cm、器高4.9cm。70は底部のみの破片で、高台径は11.4cmである。杯蓋（71～73・75）はいずれも丸味を持った天井部と、屈曲して下方に伸びる端部からなるもので、つまみを欠いている。口径は71 - 14.5cm、72・73 - 16.0cm、75 - 17.8cmである。平瓶（76）は頸部のみの破片で、外面は黒灰色、内面青灰色、断面は暗紫灰色を呈し、自然釉がかかるもので、長岡京で特徴的なタイプの壺Gの焼成に似る。甕（80）は口径20.4cmの小型のもので、口縁端部は外傾して上下に広がる平坦面を持つ。内外面に自然釉が付着する。

土坑S K 22出土遺物 数は多くないが比較的大きな破片が多い。土師器杯A、皿A、皿C、須恵器杯B、杯蓋、甕がある。杯A（51）は口径16.0cm、外面ヘラケズリするc手法である。皿A（54）は口径14.6cm、器高2.6cm、外面剝離が激しく調整不明であるが、c手法と見られる。皿C（63）はほぼ完形で、口縁部および内面をヨコナデし底部外面は不調整。口径9.8cm、器高1.8cmで、口縁端部に燈火器使用の痕が残る。杯B（68）は口径16.2cm、器高5.3cmで、口縁部が直線的に伸びるもの。杯蓋（74）は天井部は丸味を持ち、端部は屈曲して下方に伸びる。口径17.8cmで約1/2が遺存するがつまみを欠く。甕（81）は口径31.4cm、胴部最大径50.5cmの中型の甕である。口縁端部は直角に折れ曲がり、平坦面を作る。全体に薄く作られ、外面は格子状のタタキ痕、内面には細い同心円の当て具痕を残す。精良な胎土で灰白色を呈する。



60 - SD01 55 - 59-61-62-64-67-69 - 73-75-76-80 - SD14 65-78 - SA15 51-54-63-68-74-81 - SK22  
 66 - P92 52-53 - P97 79 - P114 77 - P149 50 - 包含層  
 50 - 65 - 土師器 66 - 81 - 須惠器

第27図 出土遺物実測図 - 3 (1/4)

柵S A 15出土遺物 柱掘形内からの遺物は少量である。土師器甕(65)は、P 4出土。くの字状に外反する口縁部で、端部は内面に肥厚している。頸部は強いナデにより凹んでいる。口縁部内面ヨコハケ、外面はタテハケで調整する。須恵器壺M(78)はP 1出土の口縁部のみの破片で、口径3.6cm、端部は丸く納め、内面に絞り痕が残る。

その他の出土遺物 この他に調査地内のピット、溝、包含層から長岡京期の遺物が出土しているがほとんどが混入である。50は包含層出土の土師器皿A。口縁部は上方に伸び、端部はわずかに外反する。底部のみヘラケズりするb手法で、内面には螺旋条の暗文を施す。赤褐色を呈する特徴ある胎土で、河内地方産と見られる。52・53はピット出土の土師器杯Aで、52は口径16.4cm、口縁部をヨコナデし底部は不調整である。53は口径17.3cm、内湾する口縁部を持ち、外面全体をヘラケズりする。60はS D01出土の土師器椀A。竹藪地境溝S D01は溝S D14を切っていることから、条坊側溝に伴う遺物の可能性が高い。口径13.4cm、器高3.7cmで外面をヘラケズりするc手法である。66はピット出土の須恵器杯Bで、大きく直線的に開く口縁部を持つ。口径12.9cm、器高4.6cm。77・79は、同じくピットから出土している須恵器壺である。77は壺Lの底部片で、高台径7.4cm。79は壺Mで口縁部を欠いている。胴部径7.4cm、高台径4.2cmで、底部に糸切りによる切り放し痕を残している。

#### 弥生時代の遺物(第28図)

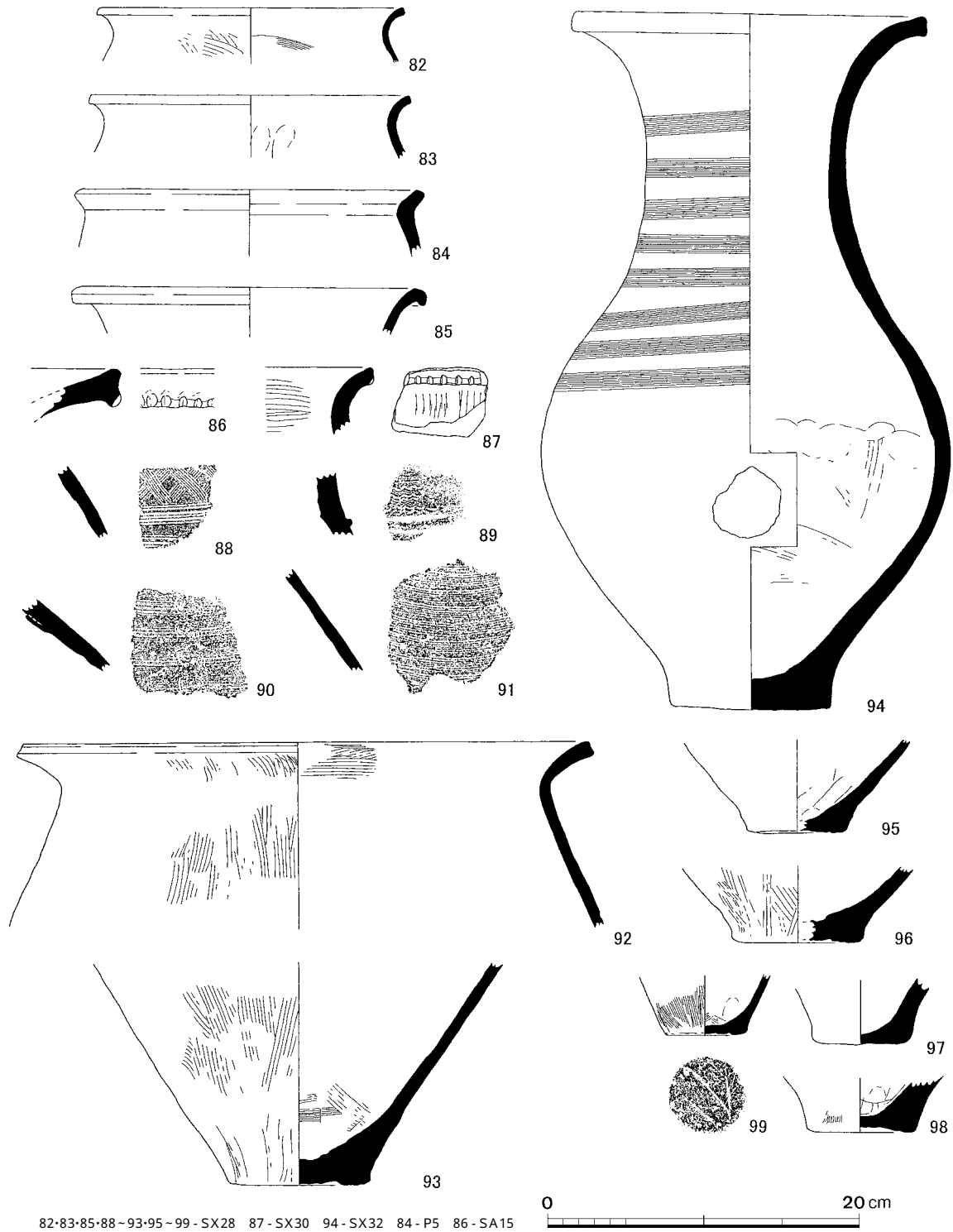
全体に出土量が少なく、大半は方形周溝墓S X28の周溝内出土のものであるが、破片が多い。また当然のことながら、長岡京期～鎌倉時代の遺構からも破片が出土している。他にほぼ完形で出土した周溝S X32の壺がある。

方形周溝墓S X28出土遺物 前述のように破片が多く、表面も摩滅したものが多い。甕は口縁部が緩やかに外反するもの(82・83)と、くの字状に外反するもの(92)があり、いずれも外傾する平坦面を有する。82・83は口径20cm前後で、92は口径37.2cmの大型のものである。表面が観察できるものでは、基本的に口縁内面は横方向のハケメ、外面は縦方向のハケメで調整する。壺の口縁部はS X28出土のものでは図示できるものは1点のみで、他は体部片である。85は口縁部が大きく広がり、端部は外側に屈曲して丸味を帯びた端面をなす。口径23.0cm。88は櫛描きによる格子文と直線文を施したもので、表面は比較的良好に遺存している。格子文は幅約0.9cm、7条のもの、直線文は幅約1.2cm、6条で、施文の原体は異なっている。89は厚みのある体部で、頸部付近に細い突帯を貼り付け上部に櫛描波状文と直線文を施すもの。90は間隔を開けた櫛描直線文の上に扇形文2つを縦方向に施し疑似流水文としたもの。91は幅約0.8cm、6条の櫛描直線文を密に施している。一個所文様の重なる部分があり、右回りに施文されたことが判る。底部片(93・95～99)のうち、93は92と同一個体と見られるものであるが、体部片がなく、接合はできなかった。外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメを施し底部外面は円形に凹む。99の小型のものは外面に木の葉圧痕を残している。

周溝S X32出土遺物 94は周溝内から横倒しの状態で出土したほぼ完形の壺である。口縁端部は外反し、端部は平坦面をなす。底部は突出気味に作る。外面全体にヘラミガキし、その後胴部



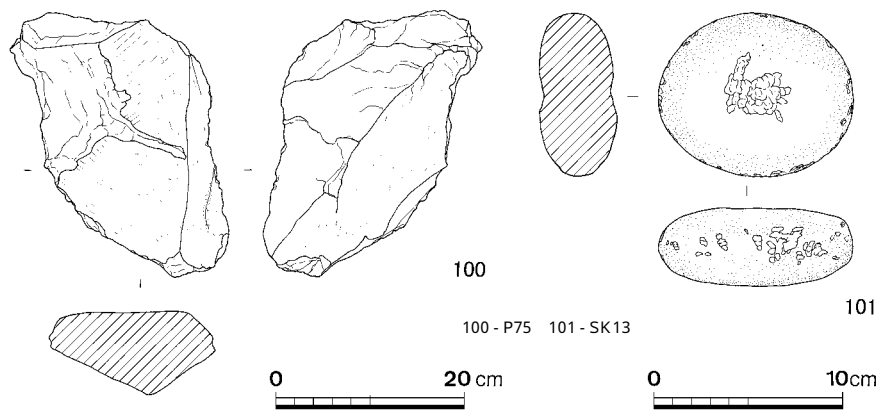
上半から頸部にかけて9条の櫛描直線文を施している。内面は体部下半にハケメが残るがナデにより明瞭ではない。胴部最大径付近には接合時の指圧痕が残る。胴部中央部には4~4.5cmの外面からの穿孔がある。全体に厚手の作りで、口径は22.5cm、器高44.5cm、胴部最大径26.1cm、底部径10.3cmである。



第28図 出土遺物実測図 - 4 (1/4)

その他の出土遺物 84はピット出土の甕の口縁部で、口径21.5cm。くの字に短く外反する厚手の作りである。86は長岡京期の柵S A 15の柱掘形から出土した壺の口縁部片で、方形周溝墓S X 28に伴うものであろう。口縁端部を拡張し、わずかに凹む端面を作り、下端部に刻み目を入れる。87は周溝S X 30出土の甕口縁部片。緩やかに外反し、端部に刻み目を入れている。

石製品 100はピット内に据え置かれていた砂岩で、2面に砥石として使用された跡が残っている。101は鎌倉時代の土坑S K 13から出土した扁平な楕円形の敲打石である。両



第29図 出土石製品実測図(1/8・1/4)

面と側面に敲打痕が残されている。所属時期は確定できないが、弥生時代の可能性もある。

## 5 まとめ

今回の調査ではほぼ当初予想されたとおり、江戸時代、鎌倉時代、平安時代、長岡京期、弥生時代の各時代の遺構、遺物を検出することができた。このうち鎌倉時代、平安時代についてはそれぞれ13世紀、10世紀～11世紀にかけて遺構が存在したものと見られるが、周辺地を含めて散在的であり、遺跡の性格については今なお不明な点が多い。以下においては江戸時代、長岡京期、弥生時代について述べることにする。

### 江戸時代勝龍寺城

今回の調査では柵列と土坑を検出したが、掘立柱建物などは確認できなかった。検出された柵列は2条が並行しており、調査地内では「コ」字型に配列されているように見える。また内側に当たる柵はいずれも柱掘形が大きく外側のものは小さい。これは建物の性格・機能によるものか、あるいは規模を違えて建て替えが行われたものか、現段階では判断できないが、前者の可能性が高いと思われる。特に旗竿の支柱かと思われる土坑は、この施設の性格と関連するものと見られる。当地は『永井直清公御在所城州神足之図』によれば本丸のすぐ北に位置する区画にあたる。絵図では東西方向の長方形の区画が描かれるが、今回検出された柵列はほぼこの区画内の西端に納まる。絵図全体ではそれぞれの区画内に住人の名前・役職・施設名などが細かく記されているが、なぜかこの部分には何も記されず、どのような施設が存在したのかまったく不明である。絵図には何カ所かにこのような空白部分があり、本丸部分も同様に空白となっている。しかしながらこの本丸部分で行われた右京第279次調査<sup>(5)</sup>では、掘立柱建物、柵列、井戸など多くの遺構が検出され、規模も江戸時代勝龍寺城の遺構の中ではかなり大きなものであった。したがって絵図の空白部分は施設が存在しなかったものではないことが判る。今回検出された柵列は本丸と

同規模の柱掘形を持つ大きなものであり、さらに本丸のすぐ北に接していることから、比較的重要な施設が存在していたものと見られる。あるいは絵図の空白部は重要個所に限り意図的に記入を避けた可能性もあろう。建物の性格と合わせ今後の課題である。

#### 長岡京期

六条条間小路北側溝とその北側の右京六条一坊七町の宅地の一部を検出した。北側溝は遺存状況は良くなかったが、ほぼ推定通りに検出され、その北側で柵列が見つかったことにより、柵列に囲まれた宅地が存在したことが明らかとなった。しかしながら宅地内では、塵芥処理用と見られる土坑が1基見つかったのみで、建物・井戸などは存在しなかった。調査地内では正方位に近い方形掘形を持つピットは、柵列以外に確認できず、遺構は非常に希薄である。もちろん部分的な調査で断定はできないが、朱雀大路に近い右京六条一坊という立地としてはやや特殊な感がある。当地の南西部で行われた右京第606・630・654次調査では、おそらく右京六条一坊十一～十四町の4町域を使用して、その中に多数の東西棟建物を整然と配する極めて特異な宅地利用の状況が明らかとなっている。当地における状況も、あるいはそのような特異な宅地利用の実態と関連するものかも知れない。ただこれに関しては出土遺物の量も少なく、また遺構の性格を推定できるものもないため現段階では推定に止まる。

#### 弥生時代神足遺跡

今回の調査では弥生時代中期の方形周溝墓群が確認された。これまでの神足遺跡の調査成果により、弥生時代神足遺跡の居住区域はほぼ現在のJR長岡京駅の南東部にあり、周囲には方形周溝墓を中心とする墓域が形成されていたことが判明している。JR長岡京駅西口周辺で行われた右京第606・630・654次調査では新たに西側に広がる方形周溝墓群が見つかり、ほぼ居住区域を巡るように墓域が存在したことが明らかとなっている。今回の調査地はその北部墓域の一角にあたる。今回検出された方形周溝墓S X 28は、溝心々間で一辺約15m近くあり、神足遺跡では大型の部類に入る。検出遺構でも述べた如く、当調査地南部では大型の方形周溝墓が、西側では一般的な規模となる一辺6～7mの小型方形周溝墓の一群が検出されており、大小の方形周溝墓が存在していることが判明した。このような状況は東部の墓域においても確認されており、東部ではこれに土壇墓群が加わる。これらは当然階層による差異と捉えるのが妥当だと思われるが、今のところ東部墓域でしか確実な土壇墓群は確認されていない。今回は遺物が少なく検討のための資料に乏しいが、階層差だけでなく造営の時期差なども視野に入れた検討が必要と思われる。

注1) 中島皆夫「右京第494次調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年

2) 中島皆夫「右京第609次調査略報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

3) 注1に同じ

4) 原 秀樹「右京第382次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

5) 岩崎 誠「右京第279次調査概報」『長岡京市センター報告書』第4集 1989年

6) 岩崎 誠「右京第606次・神足遺跡発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第14集 1999年

7) 岩崎 誠・木村泰彦「右京第630次調査略報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

8) 岩崎 誠・木村泰彦「右京第654次調査略報」『長岡京市センター年報』平成11年度 2001年

付表 - 1 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい696じはっくつちようさほうこく
書名	長岡京跡右京第696次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	木村 泰彦
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10・1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡	ながおかきょうしこうたり 長岡京市神足 1丁目601・10他	26209	107	34° 55' 14"	135° 42' 15"	20010409	320m <sup>2</sup>	駐輪場 建設工事
こうたりいせき 神足遺跡			83			20010602		
しょうりゅうじじょう 勝龍寺城								

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 神足遺跡	都城 集落	長岡京期 弥生時代 鎌倉時代	柵、溝、土坑 方形周溝墓 建物、土坑、溝	土師器、須恵器 弥生土器 土師器、須恵器、瓦器、 青磁、白磁	六条条間小路北側溝
		平安時代	建物、土坑	土師器、須恵器、緑釉陶 器、灰釉陶器、黒色土器、 磁器	
勝龍寺城	城館	江戸時代	柵、土坑		

# 圖 版





( 1 ) 調査地周辺の航空写真 ( 北から )



( 2 ) 調査地航空写真 ( 東から )

長岡京跡右京第696次調査

図版  
一



( 1 ) 江戸時代の遺構 ( 北から )



( 2 ) 江戸時代の遺構 ( 南から )





( 1 ) 柵SA02 ( 西から )



( 2 ) 柵SA03・04 ( 東から )



( 3 ) 柵SA05・06 ( 南から )



( 4 ) 柵SA 08・09 ( 東から )

長岡京跡右京第696次調査

図版四



(1) 鎌倉時代～長岡京期の遺構(南から)



(2) 鎌倉時代～長岡京期の遺構完掘状況(北東から)





( 1 ) 鎌倉時代～長岡京期の遺構完掘状況(北から)



( 2 ) 溝SD14・柵SA15(東から)



( 3 ) P-98(西から)



( 4 ) 土坑SK21(西から)



長岡京跡右京第696次調査

図版六



( 1 ) 弥生時代の遺構 ( 東から )



( 2 ) 弥生時代の遺構 ( 北から )



( 1 ) 周溝SX32遺物出土状況 ( 北から )



( 2 ) 方形周溝墓SX28南辺周溝断面 ( 西から )



( 3 ) 方形周溝墓SX28東辺周溝断面 ( 南から )

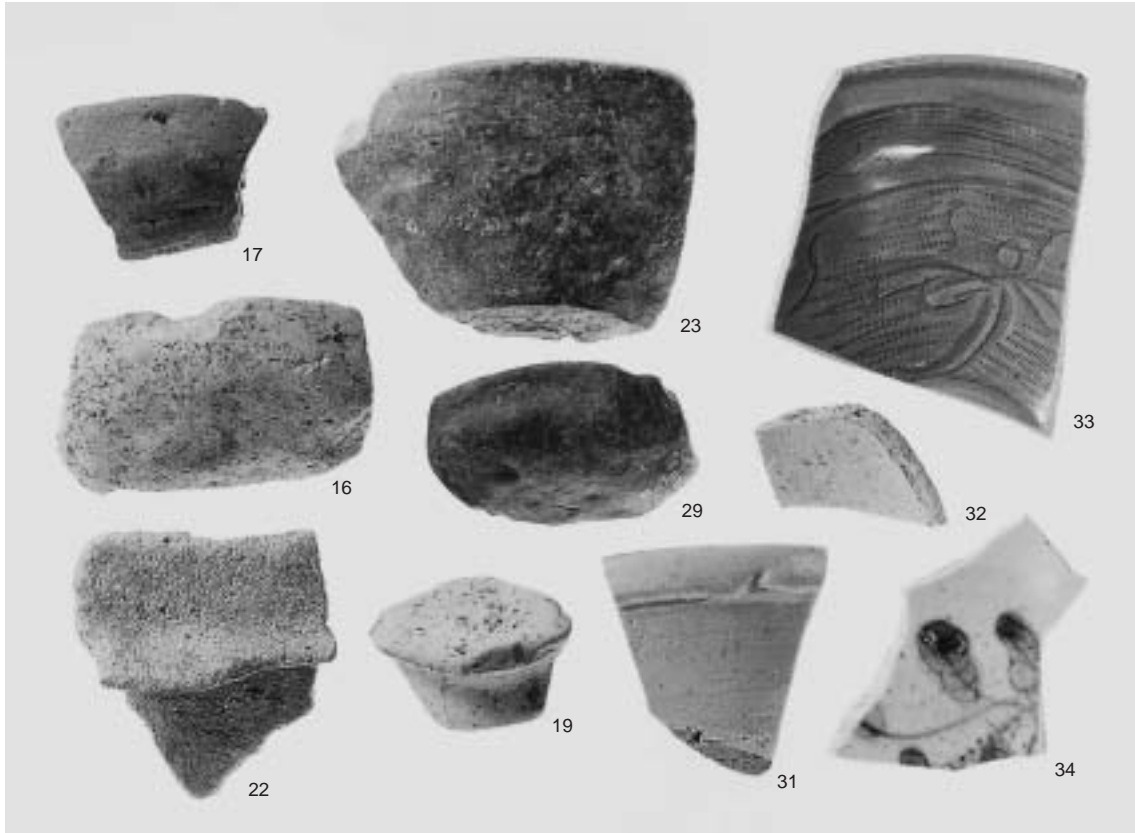


長岡京跡右京第696次調査

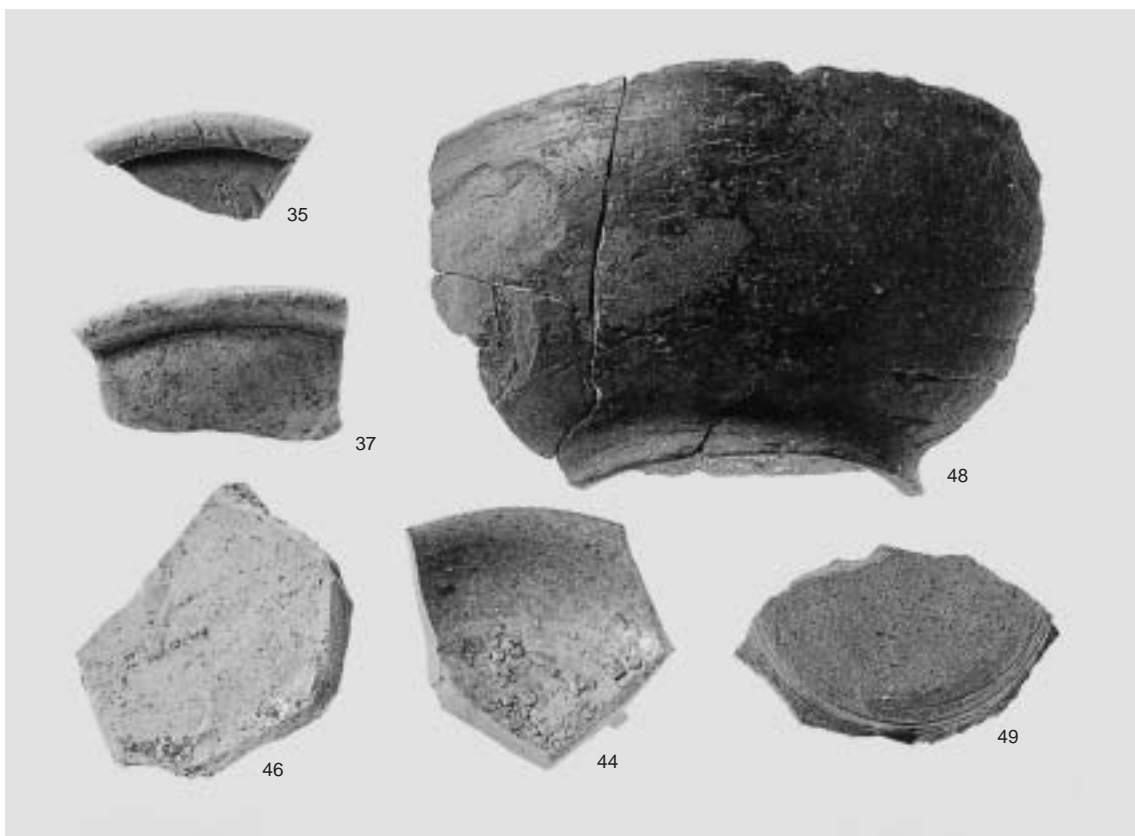
図版八



出土遺物



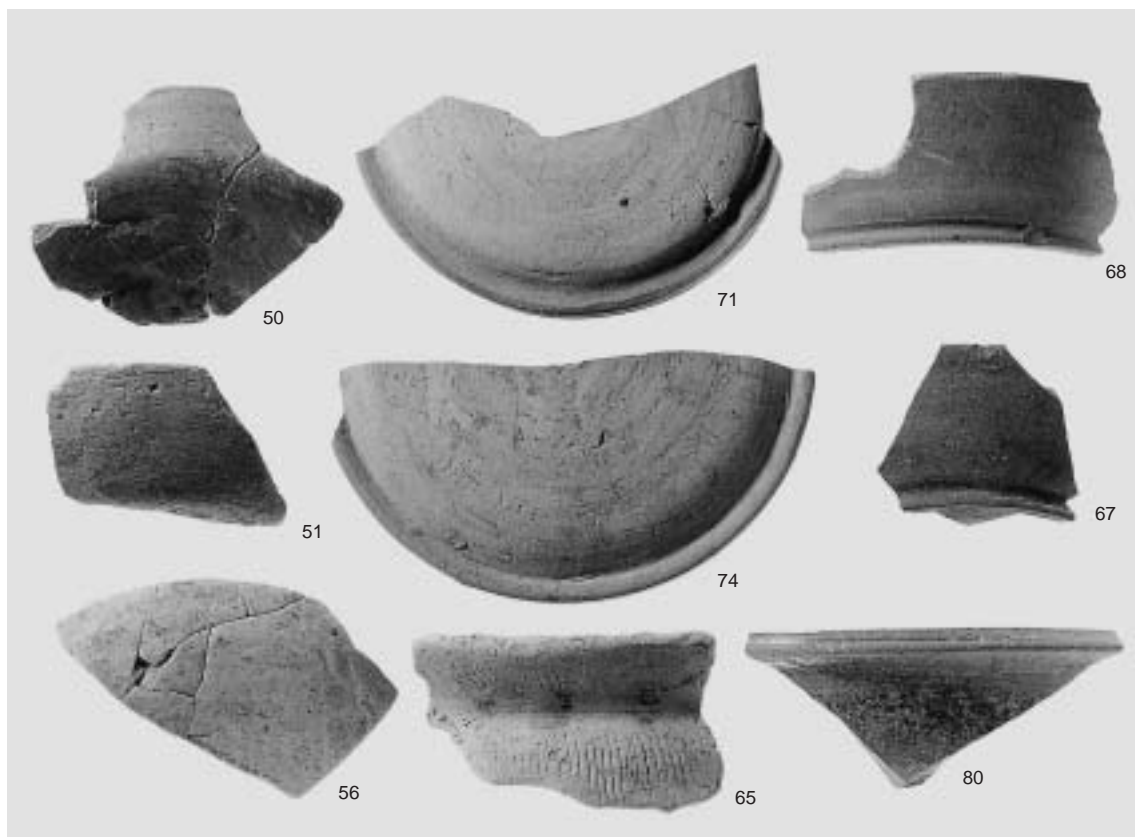
( 1 ) 鎌倉時代出土遺物



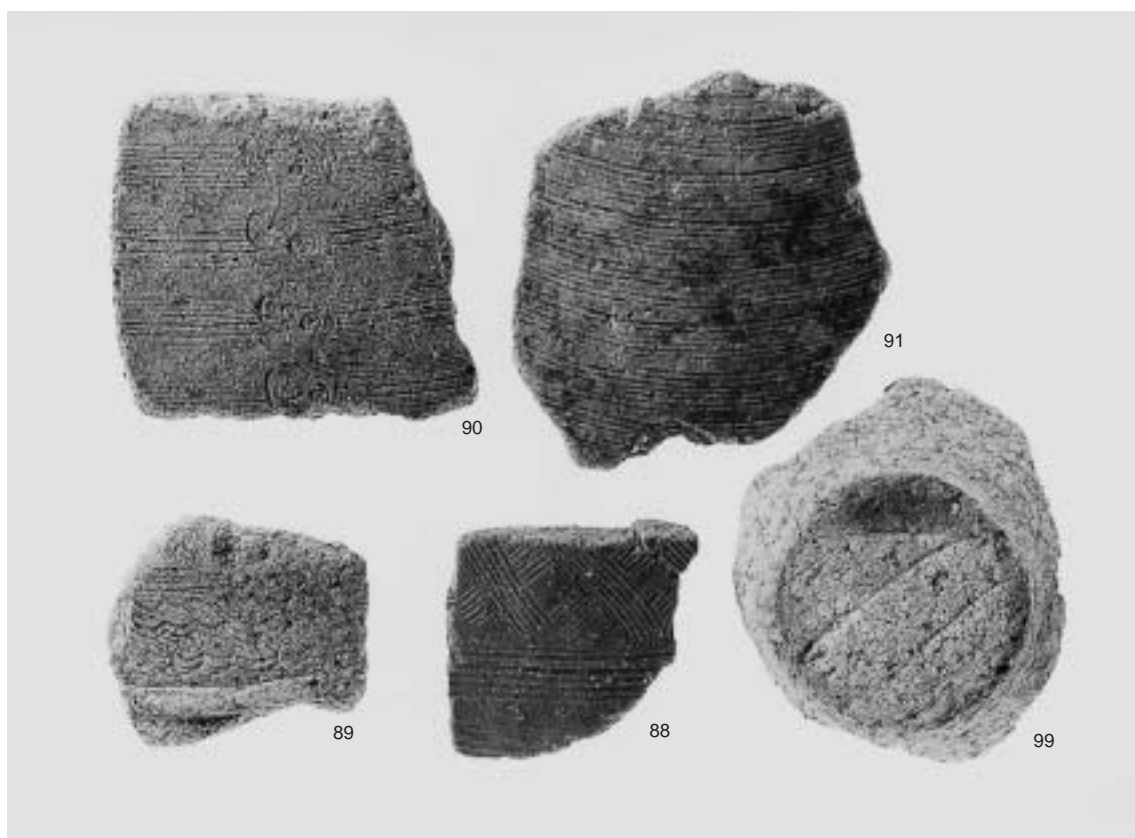
( 2 ) 平安時代出土遺物

長岡京跡右京第696次調査

図版十



( 1 ) 長岡京期出土遺物



( 2 ) 弥生時代出土遺物



長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第22集

平成13(2001)年12月6日 印刷

平成13(2001)年12月7日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617 - 0853

京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075 - 955 - 3622

FAX 075 - 951 - 0427

印刷 株式会社 きょうせい 関西支社

〒530 - 8688

大阪市北区天満2丁目7番17号

電話 06 - 6352 - 2271(代)

FAX 06 - 6355 - 2860